

独立行政法人大学入試センター  
入学者選抜研究機構入試評価部門第6プロジェクト報告書

# グローバル化と大学入試

## —第6プロジェクト（2010-12）の総括として—

平成25年（2013年）3月

独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構

入学者選抜研究機構報告書 13

独立行政法人大学入試センター

入学者選抜研究機構入試評価部門第6プロジェクト報告書

# グローバル化と大学入試

—第6プロジェクト（2010-12）の総括として—

平成25年（2013年）3月

独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構

## 目次

はじめに .....	1
------------	---

### 第1部：

グローバル化と大学入試

ー第6プロジェクト(2010-12)の総括としてー .....	3
---------------------------------	---

### 第2部：

第6プロジェクトにおける国際アドバイザー

および客員研究員の最近の研究動向(資料) .....	51
----------------------------	----

Introduction to CRESST .....	53
------------------------------	----

Eva L Baker (Co-Director UCLA CRESST)

Improving Education Quality by Teaching and Assessing 21 <sup>st</sup> Century Skills .....	61
---------------------------------------------------------------------------------------------	----

Harry O'Neil (CRESST/University of Southern California)

Common Core Standards and High / Low Stakes Test for College Admissions in the U.S. ....	73
---------------------------------------------------------------------------------------------	----

Transforming Public Education Through Outstanding Leadership

Jason K Griffiths (The Brooklyn Latin School)

AP 日本語の設計と開発 .....	79
--------------------	----

松田結貴(メンフィス大学)

はじめに

## 学力とリテラシー(文化常識)

—社会・文化政策としての入試の国際比較を通じて

入学者選抜研究機構第6プロジェクト主査・客員教授

田中義郎

今日、学力＝リテラシー(文化常識)という公式はなかなか成り立ち難いようである。学力低下論争が熱いが、憂慮すべきはむしろリテラシー教育の後退であり、両者の“溝”の深まりである。『教養が、国をつくる(Cultural Literacy)』(1987)の中で、E.D.ハーシュは、リテラシーがあるというのは、現代世界が繁栄する上で必要な基本情報を有していることである、と言っている。学校が断片的なカリキュラムに即して授業を行っており、結果としてリテラシーがやせ細って行く状況を憂い、幅広く共有された情報をもっと重視すべきであると主張した。

我が国では、今日、大学受験に対応するカリキュラムの影響を強く受ける高校生は入試の準備はできていても大学教育を受ける準備はできていないと感じる。今や大学での学びには相応の準備が必要である。大学での学びには、高校までの学びに比べ自ら学ぼうとする姿勢がより強く求められており、そうした学びへと円滑に適応できるためには、「聴く」「読む」「調べる」「整理する」「書く」といった学習技術の獲得は必須だが、考えることの大切さに気づくことが彼らの大きな一歩になる。

アメリカ ETS の A.E. シュミットは、伝統的な学力検査で測れるもの以外の要因(独創力、コミュニケーション力、チームワーク、困難な状況にもうまく適応出来る力(resilience)、企画・組織力、倫理性や誠実性)が、大学での成功には不可欠である、と言う。それは、社会での成功をも予感させる。

“大学全入時代”が現実味を増している中では、こうした提言の重要性が高まる。そこでは、入試に依存する選抜型進学は徐々に後退し、成熟したリテラシーの形成に裏付けられた教育接続による進学が主流となるべきである。その場合、グローバルな視点で“個人の高みを目指す”を支える高大接続の多様性の検討が、今後の学校教育システムの有効性を左右する指針となる。

田中義郎

## 1. はじめに —グローバル化時代の大学入試

グローバル化する社会の大学入試について議論が必要である。我が国の「学力」の定義を考えれば、5教科7科目の試験で測れるもの、という思想に至る。大学入試センター試験はそのように設計されているように思う。同様に、学力を測ることを考えた場合、諸外国には様々な学力の思想がある。例えば、イギリスのAレベル試験、ドイツのアビトゥーア、アメリカのSATやACT、韓国のCSAT、どれも皆それぞれ固有の大学文化に基づいて学力を定義し、大学の入学考査を課している。これらをどのようなプラットフォームで共有できるのか、を検討しなければならない。この課題を整理すると、我が国の大学入試は何に答えているのか、何に答えていないのか、何を測っているのか、何を測っていないのか、あるいは測れていないのか、ということについても、それらを真摯に考えてみる必要に立ち至る。

グローバル化とはダイバシティ（多様化）である。人口減少社会の進む道は、人材の多様化、多様な人材の集団に変わるという道である。そこでは、コラボレーション（協力）が尊ばれ、新しい言葉では、協働とか協創という言い方もある。産業界では、業界、業種の再編成が進行し、新たな業界、業種が誕生する。

高等教育は、グローバル・マーケットとしての学生移動の基盤というモデルを新たに考える必要がある。IIE(Institute of International Education)によれば、留学生の主要受入国、2009年度の数字では、留学生総数でアメリカが67万人、イギリスが41万人、ちなみに、日本は12万3,829人である。一方、留学生の主要送出国を見ると、中国が第一位、第二位はインド、そして、第三位が韓国である。ところが、日本の留学生受入実績では、第一位は中国、第二位は韓国、第三位以下のどこを見てもインドが見当たらない。我が国の高等教育はインドからの留学先選択の対象に入っていない。なぜ私たちの高等教育はイン

ドの留学生から選択されないのか。アメリカの主要な理工系大学では、インド系学生はマジョリティ（大多数）である。カリフォルニア州のシリコンバレー等、アメリカの科学技術産業を支えているのは、インド出身の理工学者やエンジニアの活躍である、とさえ言われる。

なぜ選ばれないのかということは、これまではほとんど研究の対象になっていないし、その理由が、大学入試に反映されているかと言えば、全くされていない。今日、グローバリゼーションに対応できるのは、多様性と可能性に着目する多元的で横断的な成長アセスメント型の評価である。

どうやら、我が国の大学入試とアメリカのカレッジ・アドミッションは相当に違う。我々の言うアドミッションズ・オフィス(AO)入試は、日本のオリジナルである。一般に、大学入試は、セレクション、いわゆる入学者選抜の装置である。それに対してカレッジ・アドミッションは入学有資格者の評価(エリジビリティ・アセスメント)の装置である。我が国では、高校卒業は大学受験資格であるが、少なくとも現状では、大学入学の有資格認定ではない。この現実を踏まえての議論が必要である。

前提には、ダイバシティ（多様性）がある。今日、グローバリゼーションとはほぼ同等の意味を持つと私は考えているが、ダイバシティに対応しうる大学入学の基盤として新たなプラットフォームが必要になる。いわゆるカレッジ・レディネスの定義である。一見、アメリカのカレッジ・トランスファー（大学間移動）やヨーロッパのボローニャ・プロセスの話にも聞こえるが、グローバリゼーションやダイバシティは、意欲のある学生が一定の水準を相互に保証された学びをいつでもどこでも機関や地域や国境を越えて享受できるシステムであり、そのために、大学の入学を如何にデザインするか、ということになる。

今、私たちは大学のゲートキーパーとしての入学システムの役割の変化という現実に向き合っている。望めば誰でも高等教育を享受できる可能性のあるオープンアクセス時代、ドアは既に皆に開かれているから、如何に彼らを大学に導くかを念頭に置いたテストや仕組みの開発がむしろ重要である。それには、彼らを後押しするもの、引き上げるものに注目して、彼らが大学生活で困難に向き合わないために何が足りないのか、何を足さねばならないのかを発見し、手当の指針となるものを用意することが必要である。

そこで、エリジビリティ・インデックス (Eligibility Index: 有資格者指標) がグローバル化の過程で活躍するのである。例えば、UCエリジビリティがある。カリフォルニア大学 (UC) のエリジビリティ・インデックスでは、高等学校のGPAを入力し、SATの点数を入力し、ACTの点数を入力すると、まずは、第1段階としてカリフォルニア大学に入学する資格要件を満たしているかどうかの評価をインターネット上で自己診断できる。この場合、特定のキャンパスに拘らなければ、10校あるキャンパスのどこかでは学べるという現実を志願者は事前に知る。しかし、これがUCバークレーやUCLAといった国際的競争力が高く人気が集まるキャンパスを希望すると、収容力を越える希望者が集中し、最終的に厳しい選抜に直面する。いずれにせよ、カリフォルニア大学システムが期待する適正な学力はこの過程で担保される。

エリジビリティ・インデックスという考え方は、大学で学ぶ学力の水準を事前に想定し、そうした学力を如何に担保し、同時に、如何に測定するか、ということに気付かせてくれる。その場合、適正な学力の再定義が求められる。カリフォルニア大学では、SATやACTなど様々なテストの結果や高校のGPAなどの日々の学習成果の集積が学力である。トランスファーの考え方は、大学生がある高等教育機関から他の高等教育機関に移動することであり、既得履修単位が移動先の高等教育機関において同価値認定される過程である。この場合、アカデミック・プラットフォームを共有することが重要である。

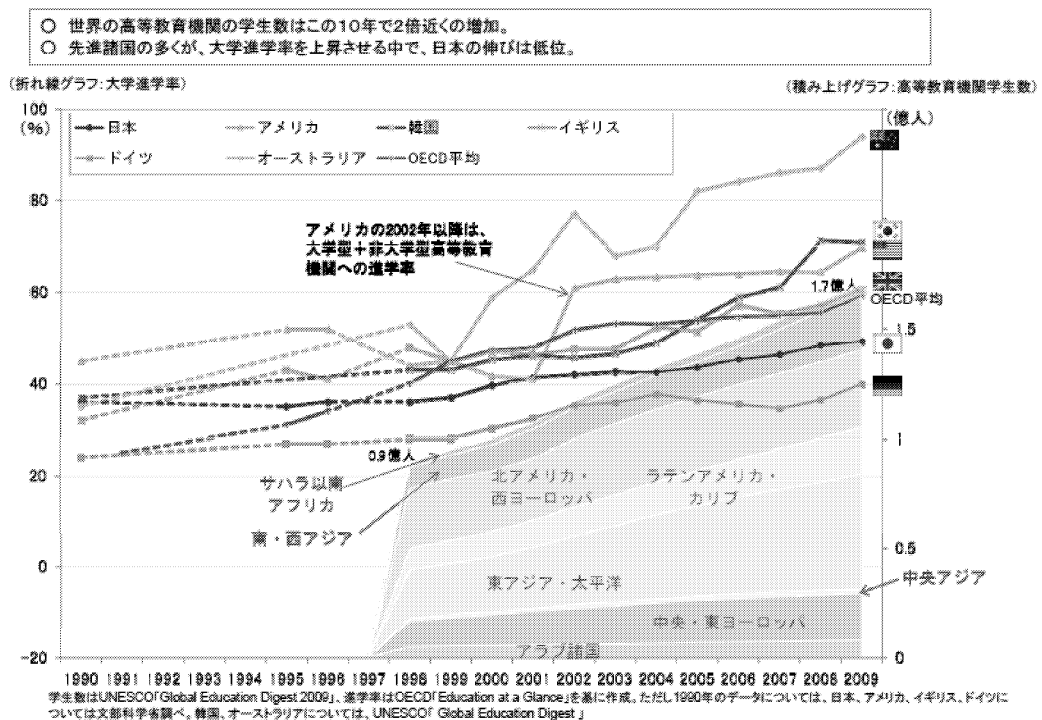
グローバル化時代とは多様な価値が開花する時代で、高等教育の進学率の高まりにより、エリート選抜による排除から、学習コミュニティによる協創、コラボレーションの時代に変わる。大学入学試験が人生を左右する決定的な転換点になるのではなく、人生を模索する出発点となるためには、入学試験はどうあるべきか。知っているだけでなく、「～できる」を評価する。例えば、知識力の他に、実験力や推論力でも、運用力や展開力でも、評価してはどうか、等。プロフィシエンシー・アチーブメント(Pro-Achievement)型アセスメントへの転換である。

そのためには、各国の大学入試の根拠となっている学力の思想の国際比較を可能にする政策研究の視点が大切である。グローバル化時代の大学入試では、大学生が有しているはずの文化的識字力(Cultural Literacy)が国境を越えて通

用する能力（Transnational Competence）として定義され、そのプラットフォームが適正に個々人の中に形成されていることが入学有資格者評価のベンチマークとならねばならない。その場合、エリジビリティのマネジメントは極めて重要である。

そこで、国の大学入試の根拠となっている学力の思想の国際比較を可能にする政策研究が重要である。

### 世界の高等教育機関の学生数と大学進学率の増加



出典) 世界の高等教育機関の学生数と大学進学率の増加、文部科学省  
 (www.mext.go.jp/component/b\_menu/.../1325048\_6.pdf)



## 1. アメリカの大学入試

### アメリカ合衆国

#### ○該当年齢18歳

		〔進学者数〕				〔進学率〕			
		2001	2002	2003	2004	2001	2002	2003	2004
		千人	千人	千人	千人	%	%	%	%
フルタイム 進学者	男	926	946	967	982	44.0	45.7	45.6	46.4
	女	1,063	1,107	1,140	1,196	50.1	50.9	50.9	50.1
計		1,989	2,053	2,107	2,148	48.9	51.1	51.1	52.1
パートタイム 進学者を含む	男	1,153	1,171	1,181	1,190	54.8	56.5	55.7	56.2
	女	1,344	1,400	1,423	1,440	58.4	72.0	71.1	71.8
計		2,497	2,571	2,605	2,630	61.4	64.0	63.2	63.8

(注)

1. 高等教育進学者数は、2年制大学と4年制大学の入学者の合計(非学位取得課程を含む)である。該当年齢以外の入学者を含む。
2. フルタイム就学とは、通常の修業年限(又はその中での各段階)内に所定の科目について一定の単位数を取得する就学形態である。パートタイム就学とは、一定期間において、規定の履習量(取得すべき単位数)がフルタイム学生の75パーセント未満である場合をいう。パートタイム就学の場合でも、所定の科目について単位を取得すれば学位が取得できる。

出典)「教育指標の国際比較(2012)」、文部科学省。

アメリカの大学入学試験は、アドミッションオフィスによる入学者決定方式として良く知られている。高校生は、学士課程教育の場合、4年制の教養系大学に出願をする。その他、コミュニティカレッジと呼ばれる2年制の短期大学(4年制大学編入コースと職能教育コースから構成され、入試による選抜はない)に出願する。故に、アメリカでの大学入学試験とは、一般に4年制大学への進学を目指す若者たちが、大学出願に際してアドミッションオフィスに提出する学力試験成績のリソースとなる試験を指している。

2010年春、ニューズウィーク紙日本語版の掲載された「激化するアメリカ入試」(冷泉彰彦著、2010年4月23日)の中では、以下のようなレポートがなされている。

「アメリカの大学入学選抜は、日本のようなペーパー試験一発勝負とは違います。入試事務室に必要な書類を提出して、主として書類審査で行われます。この大学入試ですが、長い間、例えば日本や韓国に比較すると、そんなに熾烈なものではありませんでした。とにかく入れる大学に入っておけばいい、お金をかけるのは大学院でいい、専門が決まって実力が伸びればそこから勝負、というような理由で「大学入試」自体はそれほど深刻な位置づけではなかったのです。ですが、昨今このあたりの事情はかなり異なってきました。まず、中国や韓国など、教育熱心な国からの直接の留学生や、移民の二世三世などが「やはり学部のうちから高名な大学に」という文化を持ち込んできたのが1つ、それから長引く不況の下で「できるだけ就職に有利な大学へ」というモチベーションが広がっているということから、入試の競争は激化しつつあります。」さらに、「数字の裏付けはありませんが、」と断った上で、「まず、アイビーリーグなどの伝統校では、スポーツの実績が「必須条件」によろで、かなり優秀でも、独自の研究テーマを持った学生以外は、スポーツを真剣にやって来ないと合格していません。「健全な精神は健全な肉体に宿る」というだけでなく、スポーツを通じたスケジュール管理や長期間にわたる自己研鑽の姿勢、コミュニケーション能力（アメリカの体育会カルチャーは「上に立つ人間ほど人格者」が理想とされる）などの点から、スポーツが重視されているようです。」

ここで学力測定のための入学試験として取り上げられているのが、SAT (Scholastic Assessment Test) である。アメリカ合衆国の学校制度では、高校卒業までが義務教育期間である。しかし高校間の格差が大きいうえに、その成績評価は学校によって重み付けされるので、高校の成績のみによる大学入学の判断は困難である。そこで、4500校余りの高等教育機関からなるCollege Boardが、全米で同時に実施される標準テストを実施し、その成績で生徒の大学入学の判断をすることとなった。SATは、入学者決定の判定基準とする目的で1901年に導入され、何度か大幅な改定がなされてきた。また、それに伴い呼称も変わっている。試験は1年間に7回実施され、複数回受験することが可能である。同様の役割を持つテストに、ACT, Inc. という別団体が運営するThe ACT Test (カリキュラムおよびスタンダード準拠で教育およびキャリア計画に

利用し、高校生のカレッジレディネスを評価するテスト)があり、アメリカの大学進学では、SATかこのThe ACT Testのいずれかのテストの成績の提出が義務づけられている。このテストの点数は、アメリカ国内で、T-Scoreとか、Deviation value、所謂、偏差値と呼ばれており、Raw Score (素点)ではない。200点から800点で表示され、正解率0でも0点とはされない。国内のアメリカ人に対しても、国外からの留学生に対してもSAT か ACT の得点が課される。SAT や ACT の自己得点を知らないと、多くの大学が参加している共通の出願申込書 (Common Application) の記入が完成しないので、大学出願自体が困難である。

アメリカでは、大学入学についての統一的な規定はなく、各大学の定めた入学要件にしたがって入学者の決定が行われるが、しかし、多くの大学が SAT、ACT の受験を要求するなど、共通する部分も多い。その決定方式は概ね以下の3つに分類される。

1) 高校の卒業資格のほか、高校での特定科目の履修と学業成績、SAT、ACTの成績等において、大学が定めた基準を満たした者を全員入学させるもので、多くの州立大学の入学方式がこれに相当する。有資格認定型

(Selective/Eligible) である。2) 入学希望者が定員を大幅に上回るため、高校の卒業資格のほか、高いレベルの学力あるいは特定の資格を有する限られた数の入学者を選抜するもので、一部の有名私立大学などで用いられている方式がこれに相当する。選抜型 (Highly-selective/Competitive) である。3) 成績等に関係なく高校卒業資格を持つすべての者に入学を認めるもので、コミュニティ・カレッジなどで行われている方式がこれに相当する。オープンアクセス型

(Non-selective/Open-access) である。

大学出願に際し、志願者は入学を希望する大学に願書のほか、高校の学業成績、高校からの推薦状、SAT、ACT (大学がどちらかのテストを指定している場合や、どちらを受験しても良い場合もある) の点数、エッセー (主にパーソナルエッセー) の提出が求められ、この他に面接 (インタビュー) が課される場合もある。各大学では、この情報をAO (アドミッションズ・オフィス) の入学担当専門職員 (アドミッションズ・オフィサー) が総合的に判断し入学者を決定している。

## 2. イギリスの大学入試

イギリスでは大学入学についての統一的な規定はなく、各大学の定めた入学要件にしたがって入学者の決定が行われているが、多くの大学が GCE (General Certificate of Education) 等の資格試験の合格を求め、共通点も多い。入学要件では、年齢要件として入学最低年齢を 17 歳、もしくは 18 歳とする大学が一般的であるが、例外的に、飛び入学を認める大学もある。学力判定は、志望するコース (専攻) の求める条件に合った GCE 等の資格試験の合格によって認定される。

UCAS (Universities & Colleges Admissions Service) という機関が、イギリスの大学学部コースへの入学申し込みを受け付け、入学に関わる手続きを担う大学共同利用機関である。UCAS のホームページには、「私たちは、イギリスで高等教育を受けるための出願手続き全般を扱うことを目的とする団体である。毎年、フルタイム学生として学士課程で学ぶことを期待する 200 万人以上の出願を取り扱うのみならず、出願者が相応しい進学先を見つけられるように支援もする。最新のオンラインを活用して、出願者にとって、大学にとっても、スムーズに手続きが進行できるように運営している。」と書かれている。フルタイムの学士号プログラムと Higher National Diploma (HND) コースに出願する人は、UCAS を通じて申し込む。UCAS を通じて出願できる学校はすべて、イギリス政府から認可されているか、認可された大学の認証を受けたコースを提供している高等教育機関である。一度の出願で、5 コースまで申し込める; 幅広いコースや高等教育機関が選べる; 「UCAS Apply」の機能を使って、オンラインで申し込める; 入学審査の進行状況を随時確認できる。

入学者決定方法は、合否判定に至るまでの手順は、概ね以下のようになっている。

1) 最終学年 (第 2 学年) の 11 月までに、大学・カレッジ入学サービス (UCAS = 入試事務を一括処理するための機関) を通じて出願

2) 願書は全国共通

↓

志望専攻、中学卒業(GCSE)試験の結果、自己評価欄、内申書（志願者の学習状況、GCE試験の予想成績、志望専攻への動機や関心などが記入される）などが記入される

3) UCAS→志望大学に願書送付

4) 願書による各大学の書類審査

5) 大学あるいはコースにより、面接

6) 志願者への結果通知（通常4月まで）

→「条件付合格」（GCE試験の成績次第で合格させるというもので、受験すべき科目、合格のために最低限必要とされる成績も合わせて提示）の他、「合格」・「不合格」の3種類

7) 最終合格→進学する大学を決定し、その旨当該大学に通知

8) 欠員のあるコースについては、8～9月にUCASを通じて第2次・第3次の募集が行われる

こうした過程で登場するのが GCE である。イングランドとウェールズの大学進学または専門職希望の中等学校 (secondary school) 上級生を対象に行なわれる試験の合格証明書; 試験科目は難度によって 16 歳から受ける普通課程 (O (=ordinary) level) と sixth form を修了した通例 17, 18 歳から受ける上級課程 (A (=advanced) level) に分かれ (1988 年 O level は廃止), その成績は大学進学や就職に大きく影響する; 後者には別に大学奨学金希望者のための奨学金課程 (S (=scholarship) level) がある。

さて、2012年9月17日、“The Telegraph”という新聞に「GCSE を廃止、新イングリッシュ・バカロレアが義務教育認定資格に」(By Graeme Paton, Education Editor)という記事が載った。内容は以下の通りである。

「2017年度よりイングランドの義務教育終了試験である GCSE が廃止され、イングリッシュ・バカロレアと名称を変える。GCSE では、英語と数学のみが必須科目で、社会・理科・外国語は選択制であったが、新試験制度では社会・理科・外国語の3科目も必須となることが決定した。GCSE の英語のグレーディング問題 から端を発して Exam Boards(イギリスの試験制作会社。イングラ

ンドの Exam Boards には、AQA (Assessment and Qualifications Alliance)、OCR (Oxford, Cambridge and RSA Examinations)、そして、Pearson が運営する Edexcel、の 3 社がしのぎを削っている。またウェールズの WJEC(Welsh Joint Education Committee) 、北アイルランドには CCEA (Council for Curriculum, Examinations and Assessment) という Exam Boards がある。

こうした Exam Boards がひとつに統一されるだけなのかと思いきやイングリッシュ・バカロレアと呼ばれる新資格に取って代わることが決定された。保守連立政権による教育改革の目玉であるが、旧システムでのペーパー試験への後退感があるため、野党からの反発も必至である。」

さらに、“GCSE は、イギリスバカロレア証明書の為に廃止される(“GCSEs axed in favour of 'English Baccalaureate Certificate'”)”という記事では、「イングランドの 16 才が受ける義務教育終了試験は、複数の Exam Boards が競合する関係から高いグレードをとり易く小分けにした単元毎に試験を受けられたり、コース・ワークという試験監督の目の届かない持ち帰り可能のプロジェクト・タイプの試験が不正利用されるという指摘、また学習内容自体も簡単になってきているという批判にさらされていた。今回の改訂は、これらの問題点を改善したものである。15 才～16 才 (10～11 年生) の 2 年に渡るコースで、試験は 11 年生の学年末に一度限りとなり、主要科目のコース・ワークは廃止される。これまでの主要科目は英語・数学・理科の 3 科目プラス自由選択で計 10 科目程度とされていたが、新たに行われるイングリッシュ・バカロレアでは外国語と社会が加わり 5 科目が必修となる。この新シラバスの実施開始は、2015 年秋に 10 年生になる学年からが対象で、新試験の施行は 2017 年夏学期からということになる。当初は英語・数学・理科の 3 科目ではじめ、移行措置を経た後 5 科目になる。そんな新試験の最大の課題は、学力下位層の子供の扱いである。これまで全員が同じ GCSE 試験でグレード A～G までで評価されてきたが、2015 年以降は 14 才時にイングリッシュ・バカロレアを受けられるグループと受けられないグループの 2 つに分けられてしまう。その場合、後者に「義務教育試験に失敗した」レッテルが貼られることを危惧がある。同時に、この試験の名称であるイングリッシュ・バカロレア資格はインターナシヨナ

ル・バカロレアと混合しやすい。イングリッシュ・バカロレアは、義務教育終了（中卒）レベルの学力の証明であり、所謂、IB の持つ大学入試資格とは異なっている。」

### 3. フランスの大学入試

フランスの大学は、バカロレアに合格することによって入学資格が得られる。このフランスのバカロレアとは、所謂、高等学校卒業資格試験である。したがって、大学への入学資格は高等学校を卒業していることであり、一般に、独立した入学試験はない。但し、希望者が大学に殺到するため、結果的に大学側で個別の試験を行い選抜することになってしまったのが実状である。バカロレア資格（Baccalauréat）は、フランスにおける大学入学資格を得るための統一国家試験ということもできる。フランスではバカロレアを取得することによって原則としてどの大学にも入学することができる。大学の定員を超えた場合にはバカロレアの成績や居住地などに応じて、入学できる大学が決まる。一般バカロレア、専門バカロレア、工業バカロレアの3種類がある。

一般バカロレアも科学系（Scientifique、通称 S）、人文系（Littéraire、通称 L）、経済・社会系（Economique et sociale、通称 ES）と分野別に分かれている。3つのうち理系が最難関であると一般的に考えられており、科学系セクション卒業者は全ての分野の職業に就けるとされている。その結果、明確な将来像がない若者は理系進学を希望し、近年、理系セクションの生徒数増加、そして経済・社会系の生徒数減少という現象が見られる。一方、人文系セクションは別格の存在として位置づけられており、弁護士やジャーナリストまたは作家など、明確な将来図を持っている生徒が集まるとされている。1808年にナポレオン・ボナパルトによって導入され、2005年の時点では18歳に達したフランス国民の62%がバカロレアを取得している。

バカロレアは進学する学部の専門分野によってクラス A から F まであり、進学先の学問内容で試験内容が変わってくる。高等学校卒業資格試験という通り、試験問題の作題から試験場を含めて実施まで、原則、すべて高等学校側が実施

する。以前は全国一斉に同じ問題で試験を行っていたが、約10年前から大学区ごとに分離して実施している。但し、問題は2・3の学区が共同で作ることもあり、どの教科も約3時間程度の長時間を費やして解答を求める論述式の問題になっている。

VIEWS 2010年夏号(第22号)に“フランスの大学と受験システム”という記事(Ono=Descombes, Yasuko)が掲載された。

「フランスでは大学に進むのに大学別の受験はなく、いわゆるバカロレアと呼ばれる高校卒業資格がそのまま大学入学資格なので、それが日本の大学受験に相当する。バカロレアは全国的に一斉に行われる。大半の者が取得し、取得すれば大学に入学できる。しかし、誰でもがその後進級できるわけではないので、大学にさえ入れば一安心といったものではない。ちなみに、文科系の1年生では毎年平均半数が落第、そのうちのまた半分は大学での勉強を諦めて、専門学校などに進路を変更する。その他、受験に相当するものでは、グランゼコールのコンクール(競争選抜型入学試験)がある。高校卒業生数全体のほんの5%ぐらい(このごろは理系のグランゼコールが増加している)の学生が、高校卒業後約2年間、グランゼコールのコンクールに備える準備学級で鍛えられてからコンクールに挑戦する。コンクールは一次と二次試験があり、それぞれ科目別に試験は3、4日続く。」

グランゼコール(Grandes Écoles (またはグランド・ゼコール、グランド・ゼコル)とは、フランス独自の高等専門教育機関である。グランゼコールはフランスに200校ほどあり、いずれも専門分野においての高度専門職養成機関としての役目を果たしている。その中でも特に歴史のある学校が名門とされている。グランゼコールには、その特性により医学・神学の分野は存在しない。そのため、医師、聖職者を志望する場合には、大学課程に進学する必要がある。グランゼコール (grandes écoles)は、グランドエコール (grande école)の複数形である。グランゼコールへの入学を希望する生徒は、グランゼコール準備学級に所属する必要がある。グランゼコール準備学級は独立した学校ではなく、主に、名門中高一貫校におけるバカロレア資格取得後の進学コースのようなものがある。グランゼコール準備学級に進学できる子女の数は限られており、そこ



からさらにグランゼコールに進学できる学生数も制限されている。1974年頃以前は、余程優秀な学生を除き、労働者階級出身者は少なかった。学生はこの準備学級で2年間勉学を行うが、1年次から2年次への進級は難しく、かつ卒業も難関である。という訳で、グランゼコールを目指す者は「太陽を見ることがない」と言われるほどの猛勉強をすることとなる。そのためグランゼコール準備学級の学生はモグラと揶揄されることもある。2年次進級できなかったものは、大学に編入することが多い。準備学級を卒業したものは、グランゼコールの選抜試験へと進む。選抜試験は、筆記（小論文形式）と面接による試験である。このような道のりを経てグランゼコールに進むと、聴講官という国家公務員相当の地位となり、給金が支給される。卒業後は専攻した分野のエリートとして扱われ、実際に政・官・財・学すべての分野においてその卒業生が多数活躍している。

「但し、これは全体からみると極めて小数であり、この進路の選択は成績が良いということの他に、そうした受験体制に耐える覚悟がないと、かえって貴重な青春の一時が灰色、ということにもなりかねない。・・・グランゼコールのコンクールに合格すれば、晴れてエリート養成機関に入りますが、コンクールに落ちた場合は、多くの学生は大学に編入する。・・・それにしても、フランスの大学の雰囲気が、日本やアメリカの大学のキャンパスで見かける青春謳歌の雰囲気とはちょっと違うように感じられるのは、キャンパスの有無の問題だけではなく、原則的に経費は国の負担となっているフランスの大学と社会との結びつき方とも関係している。フランスの大学は、学問の場でありながら、ともすると、日本のような学生たちの為のつかのまの学問と青春の場というよりも、むしろフランス社会の若い市民に向かって開かれた文化的空間のような観も醸しています。」（前掲、Ono=Descombes, Yasuko）というコメントもある。

#### 4. ドイツの大学入試

ドイツ・フィンランドにおいて、国内およびヨーロッパ各国での「大学へ進学するための資格試験」である。アビトゥーア、ドイツ語: *Abitur* は、元々ラテン語 *examen abiturium*（試験+去ること=卒業試験）から派生した語で、ドイ

ツ語圏で、その省略形「アビ」ドイツ語: **Abi** と共に次の意味で使用されている。これらの国では、この試験が第二次教育（secondary school）修了時に最高学府への資格試験として実施されている。従って、この試験に一度合格していれば、その後は一度も大学受験を必要としない。全ての大学に入れる生涯有効な大学共通入学試験と考えることができる。この試験に合格すると、ギムナジウムの成績と組み合わせて、**Zeugnis der Allgemeinen Hochschulreife** 短く「アビツォイグニス」と呼ばれる「一般大学教育を受ける資格証書」を取得でき、生徒は、その点数によって区分される範囲内の好きな大学を自由に選択して進学できる。アビトゥーア試験合格者に与えられる「アビツォイグニス」と呼ばれる資格証書は、複雑な計算の結果、最高点 1.0 から最低点 4.0 までの点数に決定される。これは「アビツォイグニスの点数」と呼ばれ、生徒の一生にかかわる数字である。この点数は、生徒の最終学年である第 1 2 学年とその前年の第 1 1 学年の授業の成績表の中から、試験が受験した必須科目と選択科目の成績だけを抜き出して集計し、さらに各科目の修得単位数を掛合せたものを合計して授業からの成績を得点化する。この授業得点に、生徒の受験したアビトゥーア試験の成績を各州で決められた方法で計算し合計したものを加算すると、「アビツォイグニスの点数」となる。この点数は、大学、そしてさらに各学部によって異なる入学許可条件の基準点数となっている。大学入学の申込みをする時には、生徒は「アビツォイグニス」を提出し、大学側は、選考結果によって個別に入学許可を与える仕組みである。尚、大学進学をしない生徒にとっても、就職選考の際に「アビツォイグニスの点数」が大切なものとなる。大学や学部によっては、アビトゥーアの平均点と待機期間による入学者の選抜を行うところもある。かつて男子の兵役があった頃は、兵役を済ませていると有利だったが、現在は兵役がないので、こうした男女の差別はない。大学、学部によっては面接などの独自の選考を行うところもある。例えば、音楽大学。大学進学希望者の増加につれて、アビツォイグニスに加えて、色々な選抜条件が入学申込みに際して増えている現状がある。

ドイツのアビトゥーアは、日本の小学校 5 年生から大学 1 年生に当たるギムナジウムの生徒が、生徒の最終学年である第 1 2 学年(第 1 3 学年の州もある)に、二回まで受ける事ができる卒業試験で、全国统一のものだが、各州の難易

度が異なっている。例えば、バイエルン州での合格は難しい。試験科目は、最低6科目・最高12科目までの各科目15点満点のテストである。例えば、6科目を受ける場合、5つの筆記試験と1つの口頭試験を受験する。試験科目は、必須科目を除くと比較的自由に選択できるが、希望する大学の学部との折り合いを考えて選ばなくてはならない。例えば、歴史を学びたい生徒には、ラテン語は大学側の既習条件に入っていることが多い。医学部志望者は、生物学や化学は必須科目とは別であっても修得した証拠を必要とされるので受けなければならない。

2011年10月21日の「現代ビジネス」(川口マーン恵美シュトゥットガルト通信)と言う雑誌には、「出る杭を伸ばしてやるドイツの教育：卒業試験が大学入学資格試験をも兼ねる「アビトゥーア」とは?」という記事が掲載されている。

「日本のような大学受験はドイツにはない。ギムナジウム(日本の小5から高3までの一貫教育を行う学校・大学へ進学する子供が行く)の卒業試験“アビトゥーア”が、大学入学資格試験をも兼ねているからだ。つまり、無事にアビトゥーアを取れば、ギムナジウムを卒業でき、大学で勉強する資格が取れる。しかし、アビトゥーアに合格しなければ、どこの大学にも入れない。大学に行くつもりで9年(最近では8年)もギムナジウムに通っていたのだから、職業訓練もしていないし、これで大学に行けないとなると、非常に困ったことになる。飲み屋の親父か、政治家にでもなるしかない。アビトゥーアの成績は、最後の2年間の試験の成績と、卒業前の一発勝負の試験の結果を、複雑な数式にあてはめて計算して決まる。最後の2年間の成績も、どれも万遍に足すのではなく、たとえば各自が選んだいくつかの重点教科は、授業数も多くなり、倍で計算されとか、算出方法はややこしい。一発勝負の方のアビトゥーアがかなりの難関で、筆記試験のほかに、プレゼンテーションもあれば、それに対する質疑応答もある。丸暗記ではどうも太刀打ちできない。採点は、評価に情が入らないよう外部の教師が入る。試験時は、カンニングを防ぐため厳戒態勢となる。このアビトゥーア、一度落ちると翌年もう一度チャレンジできるが、それでもダメなら大学進学は閉ざされてしまう。」

## 5. オーストラリアの大学入試

オーストラリアでは、現在40校の大学があり、国公立大学38校、私立大学2校がオーストラリア全土に点在している。オーストラリア国内の大学・TAFE (Technical and Further Education) に入学するためには、セカンダリーの成績が評価対象になる。高校終了検定基準がオーストラリアの各州ごとに定められている。大学進学評価基準でもあり、重要な成績評価システムである。TAFEとは公立の専門学校で、各州にちりばめられたキャンパスの数はオーストラリア全土で200校以上。TAFEのコース内容は即戦力を育成することを目的とし、仕事に直結する知識と技術を短期間で取得することができるので、最新の技術や知識を求めるさまざまな分野で活躍する社会人にも人気がある。勉強できるコースの内容は2000以上あり、コースの期間は数週間で終わるものから3年に及ぶものまでさまざまです。終業期間中多くのコースでは、各産業と連携した実地研修も頻繁に行い即戦力育成に力を入れているので、卒業してからの就職活動の際も、就学中のこのような実務経験が高く評価される傾向にある。

オーストラリアの大学入学では、全てがこの高校終了検定の成績で決まる。検定試験と、普段の授業成績を総合したもので数値を出す。例えば、メルボルン大学医学部に進学したければVCE(Victorian Certificate of Education)で98%以上のスコアを取らなければ入学は認められないし、その他大学の法学部の場合では90%以上の成績が求められる。文学部でも80%から70%前後が必要で、60%以下のスコアでは大学進学はほぼ絶望的である。その場合はTAFEに進むか各大学のファンデーションコース(Foundation Courseとは、大学入学準備コースのこと。大学で授業を受けるのに必要な学力をつけるためのものである)を経て、大学への入学する必要がある。11学年(高校2年相当)、12学年(高校3年相当)の二年間は、この高校終了検定試験のスコア取得に費やされる。厳密に言えば、オーストラリアの高校は全ての教科が単位制になっており、規定の単位を取得しなければ卒業出来ない制度でもある。特に、各教科は4ユニットからなっており11年生の1学期と2学期(前期セメスター)でユニット1、3学期と4学期(後期セメスター)をユニット2、12年生(高校3年相当)

の1学期と2学期（前期セメスター）でユニット3、3学期と4学期（後期セメスター）でユニット4といい、11年生と12年生の二年間で高校卒業に必要な単位を各教科4単位（ユニット1-4まで）ずつ、取得して行くことになる。

纏めると、概ね以下のようなものである。

1) 州ごとに違う大学入学者の決定制度がある：

オーストラリアでは、教育制度は各州の教育委員会が決定しているので、各州で大学に入学するための入学試験にも違いがある。多くの州では、高校の最終学年の最終学期に、各教科の州統一試験をすべての生徒が受け、その科目ごとの点数を高校のレベルに合わせて得点化して、それに授業の点数を加えた上で大学入学の基準点として算出して志望大学を決める。但し、クイーンズランド州では、高校卒業統一試験は行わずに、学校の授業での点数を、各学校のレベルで得点化して大学入学の基準点にしている。大学別の入学試験はなく、各州の高校終了統一試験の結果を州ごとのレベルで換算した上での点数から、自分が入学できそうな大学に入学出願をする形になる。

2) 大学出願科目は基本的に生徒が選択する：

オーストラリアで大学に入学するには、この科目を出願科目としなければならないという決まりは基本的にはない。しかし、医学部に入学する生徒が、理科の科目の中から最低2科目を選択しなければならない。また、音楽を専門に勉強する人は、当然、一般科目よりも、音楽の科目の採点が重要になると言うように、若干の要件はあるものの、一般の大学を受ける場合には出願科目要件は基本的にはない。自分が得意な科目を出願科目として選択することは重要なことになる。

3) 高等学校終了の州統一試験である：

クイーンズランド州を除くオーストラリアでは、大学入学を希望する生徒は、すべての州で、高校終了の州統一試験を受験しなければならない。卒業試験と考えることもできる。数学や英語などの必須科目がある州もある。また、受験する科目は、基本的に10単位（5科目に相当）以上になる。州によっては、日本語が選択科目になっている州や、数学などの中のレベルの高い科目などを

受験すると、それが、4単位になる州など、各州によって試験内容は若干異なる。

4) 大学出願科目が重要であり、自分で決める：

どの州でも、基本的に生徒は11、12年生時に選択教科を10単位以上取る必要がある。その選択した科目の中から10単位が大学出願科目となるので、10年生時の選択科目選びは重要である。また、選択する科目のレベルが細かく分かれている。どの州でも、数学などは、最低4段階のレベルに分かれており、自分に合った科目を選択することは重要である。選択科目は、10年生の7月頃から始まる。その前にカウンセリングを受け、将来の進路にあわせてどの科目を大学出願のための科目にするかを決める。

## 6. 中国の大学入試

人口が多いため、大学進学率はそれほど高くないものの、競争は激しい。進学率は2006年時点で22%。その後は2010年には25%、2020年には40%になるという予測がある。受験生規模は、2001年に約400万人、2007年に約1010万人となっている試験は全国普通高等学校招生入学考試（略称は高考）と呼ばれる、全国一斉の試験で行われる。2008年から「全国大学統一入試」と改称された（通称は従来のまま）中国の全国大学統一試験（大学入試と略称）は基礎教育と高等教育間の架け橋として、大学の新入生選抜、中・高等学校の教育・運営に対する調整及びガイドの役割のみならず、教育系統の統合、社会安定の維持などの重要な役割を担っている。

中国の大学は欧米と同じく9月入学のため、毎年6月から7月に試験が行われる。大学や専攻ごとの試験は原則行われず、この高考の試験結果のみで合否が判断される。志望校や専攻は、自由に選択し申し込むことができる。しかし、高考の試験結果のみで合否が決まるため、受験生は慎重に志望校を選択しなければならない。過去数年分の合格最低点を確認し、模擬試験の結果と照らし合わせて申し込む大学を決めていく。重点大学（政府が指定した優良大学、一般的に倍率も高い）2校と非重点大学2校、その他の専門学校と、出願校数に限りがある。そのため、自分の学力にあった志望校選択が重要となってくる。

試験の難易度は世界一とも言われる。これは、人口の多さによる激しい競争の産物である。難易度は大体前年度の試験とその結果を基準に基づいて確定される。前年が難しすぎと評判なら、今年は少し難易度を下げるというシステムである。原則、同じ問題を二度使用しないというルールがあり、問題の作成も密室の中で行われ、作成が終わるまで外界との連絡は一切とれないほどに重要なイベントとなっている。

「中国大学入試制度と基礎教育の関係について」劉海峰（厦門大学教育研究院院長 2011年4月20日）の要点を抜粋すると以下のようなものである。

「1952年に確立した大学入試制度のその基本機能は大学が適格な新入生を選抜し、大学の学生の質を確保することにあるが、試験を重視する中国でその機能により莫大な効果が生れ、大学入試が基礎教育の「指揮棒」となり、小・中・高等学校の教学を左右するようになった。小・中学生・高等学校生の努力向学を促進し、民族の文化水準を向上させる。大学入試の良い機能と役割は一語で言えば、試験で学習を促すことにある。入試制度の利点は多いが、その一つは、自分を頼り、他人に頼らないことである。」

「入試と人材選抜は人間の向学心を向上させ、努力させる。また、中・高等学校の運営と教育の方向をリード・規格化する。アメリカのSAT及びACTのような、中・高等学校教育との関係が緊密に繋がらないものでなく、中国の大学入試と中・高等学校の関係は非常に直接的なもので、中・高等学校の教育と受験勉強は方向性がないことがないように、大学入試の試験問題は高等学校のテキストの範囲と大学入試の「入試要項」を超えないと定められている。」

「大学入試は中・高等学校の運営と教育をリードする機能を付与された。大学入試は国家意思・政策と学校教育活動の仲介であり、入試科目の設置と試験問題の設計を通じて、国家は政治理論や思想意志を中・高等学校の教育に貫徹することができる。従って、大学入試は教育方針の実施、学校運営方向の規格化にとって重要な役割を持つ。」

「中国の大学入試は典型的なハイ競争、ハイ利害、ハイリスクの大規模選抜的試験で、中国の各種試験中の最も重要で且つ最も影響の大きな試験で、争議が一番大きい教育改革の一つでもある。」

## 7. インドの大学入試

「インド工科大学、入学試験を実施：倍率、53倍の狭き門」（2012年4月7日、インド新聞）という記事が載った。

「インド工科大学（IIT）は4月8日、全国1,067カ所の試験会場で今年度の入学試験（IIT-JEE）を実施した。系列15校に加え、インド鉱物大学も参加した。受験者数は50万6,000人で、前年度の48万6,000人から2万人増加した。定員数は9,590人で、倍率は約53倍の狭き門となっている。政府は2013年度から理工系の国立大学を対象に共通の入学試験「インド理工適性試験（ISEET）」を実施する方針を打ち出している。IITなどは「時間をかけて慎重に議論する必要がある」として延期を求めているが、政府の判断によってはIIT-JEEは今回が最後になる可能性もある。同校はアラブ首長国連邦（UAE）ドバイ首長国でも試験を実施しており、今年度が5回目。今回は186人が受験した。これまでドバイからの受験者数は200-220人で推移していたが、今回はやや落ち込みが目立った。今回から鉛筆の使用が禁止され、黒のボールペンで回答することが義務付けられた。」

インドの頭脳の輩出大学であるIIT（Indian Institutes of Technology=インド工科大学）は、国立高等教育機関の総称であり、現在、インド各地に15校ある。IITは、今や世界の頭脳の輩出大学として、技術系では世界最高峰大学の一つに数えられている。インド人にとっては夢の大学、その全国一斉共通入学試験が4月11日に実施される。IIT-JEE(Joint Entrance Examination)が15校共通の試験問題を作成する。問題は、数学、物理、化学の3科目、分析力と論理的思考力を徹底的に試す形式で、出題は全て英語。今年の試験は、インド全土1,026会場とアラブ首長国連邦ドバイの1会場、計1,027会場で一斉に実施される。昨年の受験者は約39万人、今年の願書提出者は約47万2千人、8万2千人も増えている。問題はIITの定員である。IITは1951年にインド国内で知的水準の高い科学者を養成する為に設立された。2001年当時は7校、定員3,500人に受験者18万人、約50人に一人2%の合格率であった。インドの頭脳が世界に注目され始めた頃である。その後、定員



を5,000人に増やしたが、年々受験者が増え、数年前の受験者は30万人、合格率は60人に一人、2%を下回った。

2004年に政権を奪回した国民会議派、マンモハン・シン首相は、教育と貧困対策を国策の両輪とした政策を展開し始めた。貧困票確保の狙いもある。新政権は、富裕層の激しい反対を押し切って、人口の約25%を占める「指定カースト」「指定部族」の子弟に22%の国公立大学の優先入学枠を設定する法律を制定した。その際、富裕層の不満解消する解決策としてIITをインド各地に9校新規に設立して、定員を大幅に増やす策に打って出た。時流に乗った策であった。2008年には6校、2009年には2校が開校、2010年に1校が開校する予定である。1校あたりの定員数はむやみやたらに増員させない。少数精鋭の有能な学生しか入学させない。教師対学生の比率を重視する基本方針を守り続けている。教師一人に学生5人程度…、教師が増えなければ学生は増やせない。教育の質を高度に保つ鉄則である。精々1校1学年500人が適正としている。日本の大学とはかなり異なる。2012年の入学定員数は15大学で約7,500人（と勝手に推定すると）、合格率は63人に一人=63倍、1.59%となる。合格する確率は極めて低い。受験生は皆一生懸命受験勉強をしてきた学生達、浪人もいる。競争は熾烈を極める。世界一過酷かも知れない。インド人材開発担当大臣が公式に発表した数字では、2008年度9月末現在のインド政府が正式に認可している大学は6,999校、そのうち国立大学は2,038校、IIT受験に失敗した学生は、浪人するか、外国の大学に留学するか、IITに順ずる大学を受験する事になる。インドにはIITの他にも、最近人気のある国立工科大学（NIT）、インド情報技術大学（IIIT）、インド経営大学院（IIM）などの専門大学・大学院や、名門のデリー大学、ジャワハルラル・ネルー大学、マドラス大学等々のレベルの高い総合大学が沢山ある。レベルも高い。

## 8. 韓国の大学入試

大韓民国では、大学は大学校と呼ばれる。大学修学能力試験（略称は「修能」・日本で例えるなら大学入試センター試験に近い、英語名称は、(College Scholastic Ability Test)をほとんど全ての大学が利用するため、受験生はこれを受ける。こ

れと高等学校が発行する生活記録簿（調査書）、各大学の用意する2次試験（小論文、面接、実技など）の結果を合わせて、合否判定を受ける（2次試験を課さないとか大学修学能力試験あるいは生活記録簿の結果を合わせない大学、学部もある）。

韓国は日本よりも大学進学率が高い。これには日本では専門学校で教える内容も韓国では大学（2,3年制大学が中心）で教えているという面もある。また、高校受験がなくなり内申点による実業高校と一般高校の振り分けのみで一般高校には私立・公立の差や一般高校間での格差が無く、一般高校の高校生は全員が進学を希望する。（なお外国語高等学校や科学高等学校などの特殊目的高校の高校生の大部分も進学を目標にする）よってほとんどが大学受験一回の受験の機会であるために、大学受験が激化した。（今は条件さえ合えば何校でもOKである。）2006年度の高等教育進学率（大学に順ずる高等教育機関＝専門大学つまり日本の短期大学・専門学校相当を含める）は86パーセントとなり、フィンランドに続いて世界第二位である。

ソウルにある大学が難関になっている。ソウルではSKYのソウル大学校（S）を頂点として高麗大学校（K）や延世大学校（Y）などがそれに続く。地方では浦項工科大学校や韓国科学技術院が特に難関であり、釜山大学校などがそれに続く。学部ごとにみれば、文科の場合は経営学部、理科の場合は医学部の難易度が高い。法学部は高い難易度を誇ったが、法学専門大学院（日本の法科大学院に相当）を導入した大学は2009年から廃止となった。

韓国は極端な学歴社会であり、李氏朝鮮は科擧の合格者、学者が政治権力をも握る高級官僚となり、立身出世への関門であったため、その伝統が今日にまで関係していると考えられる。受験生は年少の頃から自由時間を犠牲にし、深夜まで営業する塾に通うほど過酷な受験戦争を戦う不健康な生活を送るため、受験生の負担軽減が課題となっている。一例を挙げると、予備校や家庭教師による補習が可能な都市部の学生がより有利であるとして、地域格差解消のために教育専門の全国放送局、EBSが修学能力試験に関する講座を放送する専門チャンネル（EBSプラス1）を開設している。また、受験戦争を勝ち抜くため韓国の保護者は子供にOECD加盟国の中でトップとも言われる多大な私教育費（塾などの個人負担教育費）をかけている。そのため子供にかかる教育費を賄えない家

庭や子供を持つことが出来ない夫婦が増えていて韓国の出生率を世界最低水準（1.08人）に落ち込ませる要因の一つとして問題視されている。それでも、1回の試験に人生を左右される構造には変化がない。2004年に修学能力試験における大規模な携帯電話を使ったカンニングが発覚し社会問題となった際には、改めてその弊害が指摘された。さらに、高学歴層の就職率が必ずしも高いわけではないこと、海外留学が盛んになっていること、また各種の競争緩和政策が効果を発揮しだしていることに伴い、就職できない学生・院生が続出し「学歴難民」として社会問題化しつつある。

メディアにより報道されるときなどは日本の大学入試センター試験に例えられるが、厳密には異なる。日本の場合、国公立大学および私立大学のセンター試験利用入試の志願者だけが受験する必要あるが、韓国では国公立を問わず4年制大学の志願者全員がこの試験を受けなければならない。この試験の結果次第で受験できる大学が、そして高校卒業後の人生が決まると言われている。言い換えれば、韓国の青少年における通過儀礼というようなものである。試験結果を悲観した女子高生が自殺するといった事件も過去に起きている。

高校のカリキュラムにそった学力試験となっており、大学教育に適した能力を受験者が有しているかを測定することを目的としている。試験問題は試験後に公表され、再利用されることはない。大学は、高校作成の「総合生活記録符」と呼ばれる内申書および2次試験と合わせて総合評価するが、この大学修学能力試験が最大の比重を占める。比重は大学、学科、受験方式により異なる。試験の実施・運営は韓国教育課程評価院が行っている。試験日は入学前年11月の木曜日に設定され、1日で全ての試験を行う。2012年度は、2011年11月10日に行われた。追試験・再試験は実施されない。

試験問題作成は教育課程評価院（KICE: Korean Institute of Curriculum and Evaluation）が委託した問題作成委員（大学教授、高校の教員も一部参加）が作成する。試験問題の最終決定までの過程で、チェック委員会のチェックを何回か受ける。機密保持のため、1ヶ月程で作題から検討、印刷、実施までの工程を網羅する。また試験終了後、教育課程評価院は試験問題に対する異議申請を受けて審査した後、最終正解を発表する制度をとっている。試験場として高

校や中学校が使われ、大学は使われない。受験場所として受験者本人が在学している高校以外の高校または中学校が指定され、男女別の試験会場となる。

「大学の自律性を伸長し高校教育の跛行を改善する」という目標の下で、1991年に発表された新しい大学入試制度により、1994年度（1993年実施）から導入されている。第1回の試験は年に2度実施したが、第2回となる1995年度（1994年実施）から年に1度の試験となった。その後、1997年度（1996年実施）から国公立大学では、国語・英語・数学中心の大学別の入試試験が廃止され、内申書に記載された成績（40%以上）、大学修学能力試験の成績、小論文、面接試験、実技などが合否選考の資料となった。2001年度（2000年実施）には第二外国語領域が追加された。

願書は卒業見込生（現役生）は在学中の学校に、卒業生は出身学校に、検定考試合格者は現住所管轄市道教育監が指定する場所に提出する。願書受付は本人が直接提出することを原則とし、郵便では受け付けない。特に願書受付時に自分が選択した領域と科目に関しては、受付証発行後は一切変更できない。選択した領域と科目が各大学が必要としているものと同じでなければならない。また、願書に付ける写真は、最近6ヶ月以内に両耳が見える正面上半身を撮影した、パスポート用規格写真でなければならない。受験生は、進学を希望する大学によって各科目を選択して受験する。極めて厳格な規定がある。

解答は全てマークシート方式で、指定されたペンで塗り潰して解答する。数理領域（数学）は多岐選択式問題と短答式問題がある。短答式問題はセンター試験の解答形式と異なり、解答は全て3桁以内の自然数である。短答式問題の各問には3桁分のマーク欄があり、空白となる位には何も塗り潰さない。例えば答えが「25」の場合、百の桁の数字は何も塗り潰さず、十の桁は2を、一の桁は5を塗り潰す。また負数・虚数・平方根など、自然数以外が解答とはならない。なお、2005年度までは短答式はなく、解を解答用紙に直接記す記述式であり、この採点は任命された大学教員が指定された方針に従って行われていた。

言語領域（国語）と外国語領域（英語）では、リスニングテストが実施されている。以前は軍による監視の下、問題をFM放送を使って各試験会場に送信し、それぞれの校内放送で一斉に聞かせるという形式をとっていた。しかし、受信

などでトラブルが発生したため、現在では問題が録音されているカセットテープを校内放送を使って一斉に聞かせる形式に切り替わっている。音量や音質についてのトラブルで、一部の会場で一時停止が行われるが、日本のセンター試験のような大規模なトラブルは発生していない。また、現在、英語の試験のみ、資格試験型オンラインテスト(National English Ability Test)に移行すべく、実験が始まっている。

社会・理科・職業探求で数科目受験している場合、指定された順番通りに解答する。また、試験時間おきに解答用紙が回収される。問題は全科目とも20-50問の独立した問題で成り立っている。日本のセンター試験のように大問のテーマに沿って数問の問題が出される形式ではない。

試験終了後1ヶ月程で本人に成績が通知される。また、大学は全資料をCDで受け取り、個人特定IDで検索して利用する。教育課程評価院が提供する成績は、素点以外に標準点数(言・数・外領域は平均100標準偏差20、探・二領域は平均50標準偏差10)、百分位、「Stanine」(Standard Nineを略した造語)と呼ばれる9等級の成績、の計4種類の指標である。各大学は成績の評価方法を事前に公表しているので、受験者は通知された点数を基に、最終的な進学希望大学・学部を決定する。

なお、2007年は受験者に対して通知するのは等級のみとし、点数は通知しない方針を採った。これに対して受験者から不満の声が多く挙がり、主催側は成績発表日を予定より早く繰り上げる措置を取って対応した。2008年から従来の方式に戻る。

## 9. まとめとして -日本の大学入試の状況に照らして、

「大学の 대중化には、大きく二つのストーリーが存在する。」とは、大学入試センター入学者選抜研究機構長の荒井克弘の論である。一つは、綿密に計画を立て、 대중化をデザインして、 대중化を実現した国のストーリーであり、他の一つは、社会経済発展の過程で、高等教育の拡大が顕著に進行し、その結果として、 대중化を手にした国のストーリーである。文部科学省の大学改革実行プランや民主党の文部科学部門大学改革ワーキングチーム報告書が示されたところ

るである。「ビジョンの交代」がダイナミックに展開する予感がする。

1960年に策定されたアメリカ、カリフォルニア州の高等教育マスタープランの眼目は大学大衆化にあった。当時、日本の大学はまだ“大衆化”の直前にあり、戦後の新制大学は格差解消に躍起となっていた時期である。それから50年を経て、日米両国はともに大学の大学大衆化を実現させた。コミュニティカレッジ、州立大学、そしてフラッグシップ大学（カリフォルニア大学）の三層構造がマスタープランの骨格を成していた。そこには、旧来の大学モデルにはない「格差」が意図的に設計され、格差の生み出す競争と移動が「大学の大学大衆化」と「教育・研究の質向上」を推進する原動力と考えられた。コミュニティカレッジは、「入学者選抜を前提としない全入型の高大接続（開放入学制）」を採用し、入学後の学生たちには、学びのインセンティブとして、より威信の高い大学へのトランスファー（転学）を可能にするシステムが用意された。戦後日本はアメリカの高等教育をモデルとして、それを追走しながらもマスタープランを策定することはなかった。今日、日本が21世紀の高等教育マスタープランを策定するとすれば、その要点はどこに置かれるのか、考え、実行する時期が来ている。

日本では、高大接続問題の新たな展開にむけて、「選択のための支援基盤」の創造が必要である。というのも、今や、「選抜」は機能しているとは言えないが、「選択」は常になされている。“選択のための支援基盤”の整備が急務である。大学入試で、変化すべきもの、日々改善の努力をし続けなければならないものは何か。高等教育機関は、21世紀に、社会に出るすべての若者たちの準備をする装置となる、との認識が必要である。それは、高等教育の社会インフラ化の検討である。

「中等教育では、多くの若者たちが大学進学か、就職するのか、極めて限定された選択肢の中で育てられている。様々な職業で必要とされる知識や技能の間の関係は、今日、それほど大きな隔たりがあるわけではない。専門職では、むしろ、相互横断的に似通った能力が期待されることも多い。それ故、彼らの学びは、結果的に似通っており、むしろその関係の繋がりこそが重要である。」と指摘するのは、2011年2月にハーバード大学教育大学院が出した「繁栄への道(Pathways to Prosperity)」と題したプロジェクト報告書である。副題に

は、「21世紀のために、アメリカの若者たちの教育目標を達成する」と書かれている。いわゆる知識基盤社会人基礎力、つまり GPS (General Purpose Skills) の重要性が指摘されており、それは同時に、21世紀に活躍する大多数の成人に必要とされるスキル (21st Century Skills) である。

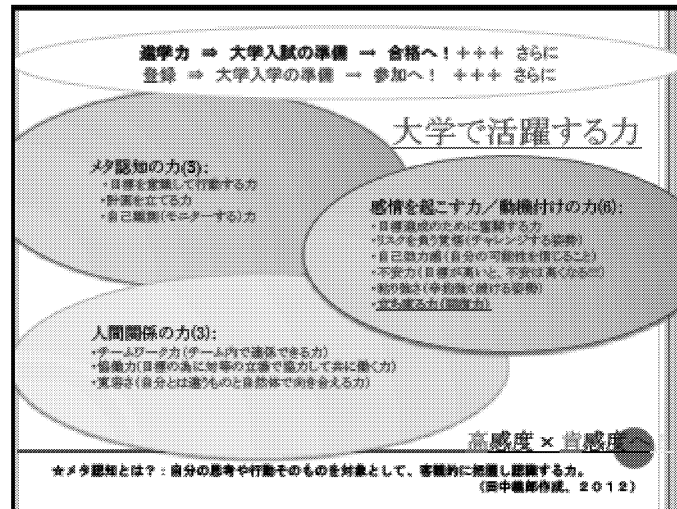
多国籍企業の人事担当者が採用に際して期待する力として、(1)Read:自分の考えと結びつけながら読む (鵜呑みにしない) ことができる、(2)Question:自分の考えとの違いに対して質問や疑問を適切に設定することができる、(3)Analyze:自分の考えと他の考え・視点と比較して分析することができる、(4)Communicate:比較や分析を通じて行った自分の判断を伝えることができる、が上げられる。

わが国の大学入学では、現在、年齢人口の半数以上が大学・短大に進学する。その中で、学力試験を経て大学に入学する者は50%台に留まり、推薦・AO入試などの非学力型選抜の割合は43% (私立では50.5%) を超える。また、学力型一般入試を課しているにもかかわらず、定員充足できていない大学は、4年制私立大で46%あり、実質的に、無選抜入学の様相を呈している。

少子化のなかで受験競争の緩和に伴い、競争の弊害を問う声は後退し、いまや学生の学力低下、進学準備不足を憂う声がむしろ大きい。とはいえ、わが国では、未だ、大学受験に対応するカリキュラムの影響を強く受ける高校生は入試の準備はできていても大学教育を受ける準備はできていないと感じる。今や、大学での学びには相応の準備 (College Readiness) が必要である。

また、アメリカのテスト開発機関 ETS のエイミー・シュミット博士は、伝統的な学力検査で測れるもの以外の要因 (独創力、コミュニケーション力、チームワーク、回復力(困難な状況にもうまく適応出来る力: resilience)、企画・組織力、倫理性や誠実性) が、大学での成功には不可欠である、と言う。“大学全入時代”が現実味を増している中で、こうした発言の意味はますます重要性を増している。(添付図参照) そこでは、一つの試験に過剰な重きを置く High Stakes 型入試に依存する選抜型進学は徐々に後退し、成熟した文化的識字力の形成に支えられる教育接続による大学進学が重要性を増し、その場合、個人々の“高みを目指す”を支える多様な高大接続の工夫が、学校教育システムの有効性を後押ししなければならない。

添付図



例えば、アメリカでは、College Board の Spring Board (6-12 年生対象) や ACT の EPAS: Educational Planning and Assessment System (8-12 年生対象) 等が作られ、4～6 年間かけて中等教育から大学教育への有機的接続準備が工夫されている。

わが国の高大接続問題は、多様化(ダイバーシティ)に対応できる新たなプラットフォームを選択する必要に迫られているのである。それは、入学者の選抜 (Selection) から入学有資格者の認定 (College Eligibility) に移行することを意味しており、入学有資格者認定指標 (College Eligibility Index) の開発と導入が急務である。“入学有資格者認定 (College Eligibility)”とは、“大学進学準備ができている状態”を認定することである。

近年、わが国でも広がりを見せているインターナショナル・バカロレア (IB) は、「プログラムの教育力」を重視している。IB Diploma Programme 修了は、“大学進学準備ができている状態”を認定している。

現代教育では、入試を筆頭に多くの試験が開発されている。「どんな試験を作るか?」や「測定精度の追求!」も大切だが、まず、「何に使うか?」の視点が重要である。「その試験が誰にとって、何にとって有益なのか?」が前提とならなければならない。今日、個人、機関を含めて、多様な集団のニーズに応えるには、多様な複数の試験の開発が不可欠である。グローバル化時代とは、多様な価値が開花する時代であり、高等教育への進学率の高まりは、「排除



(=Selection)の為の選抜型試験から協創(=Collaboration)の為の入学有資格認定型の学習診断テストへ移行する」ことによって後押しされねばならない。その場合、大変ものがかかっている”The 入試”から”いわゆるひとつの学力診断”としてのテストへと現実的に展開すべきである。例えば、韓国の大学入試では、最近、英語に関して、資格試験化を模索しており、既に実験中である。

すなわち、高大接続の新たなデザインを考えるに当たっては、**High Stakes**型入試のマイナスの連鎖から抜け出すと言う視点、が大切なのではないか？

“**High Stakes**”とは、「大変なものがかかっている」という意味である。一般に、テスト実施者である学校や大学がそのようなテストに基づいて行う学生の振り分けや、卒業資格および入学許可の判定等に利用される。一方、「日々の学習診断」のためのテストは、**Low Stakes Test**と呼ばれる。テスト理論の権威であるコロラド大学のロバート・リン博士等の指摘によれば、「**High Stakes Test** は、その社会的重要度故に、教師を学力競争に巻き込み、(テストで高得点を上げるための準備に駆り立てるために)、学生たちの実際の学力を誇張しがちである。そして、基礎技能を軽視し、カリキュラムを意図的にテスト内容に傾斜して構成する傾向が生じる。テストの持つ否定的な側面を回避するには、できうる限り、様々な測定ツールが利用されることが求められる。学力診断はもちろん学生のパフォーマンス評価には、判断基準となる複数の指標が必要であり、複数の学習診断テストの継続的利用が有効である。」

しかし、シュミット博士が語るように、「**GPA** とテストスコアだけでは、個々の学習者の大学進学適性はわからない。」という現実とどのように向き合うのか？ 実際、大学生活での成功には社会での成功と同様に多様な要素が含まれている。**Low Stakes Test** を活用すれば、学習活動がむしろ活発化するのではないかと考える。少なくとも、**Low Stakes Test** は、教授活動に不可欠な効果的なフィードバックによって、選択と決定を可能にする。さらに、様々な **Low Stakes Test** や **GPA** 等の学習成果情報の組み合わせによる有資格者認定指標 (**Eligibility Index**)を導入することで、**High Stakes Test** の過度の弊害を調整することが可能となるのではないかと？

アセスメントは、教師が何を主として教えるべきか、生徒が主として何を学ぶべきかに、大きな影響力持っている。アセスメントは、生徒たちにこのアセ

アセスメントの結果と社会的成果が密接に関連するものになる High Stakes アセスメントの重要性をメッセージとして送っている。総合評価も、その結果が重要な結果を導くのであれば、High Stakes である。失敗の結果が相当なダメージを被るものであれば、その掛け金は高いものになる。(ハイリスク、ハイリターン)。一般的に、High Stakes アセスメントは、生徒の人生に関わる機会である。さらに、High Stakes アセスメントは、アセスメントの結果と社会的成果の密接な関連によって困った状況を生む。社会的決定を導く量的な社会指標よりもより重要で、観測 (モニター) するつもりでいた社会プロセスを歪めたり、壊したりする。一方、Low Stakes アセスメントには、同様な印象はない。実際、Low Stakes は、生徒が未来に向かって取りうる様々な選択肢について取り消さない (やり直しが効かない) 状況を生むよりも、望ましい教育-学習の効果的達成に寄与するという意味で、社会的重要性はむしろ肯定的である。

High Stakes 評価には更なる問題がある。High Stakes 評価は、生徒の到達度を過剰評価する傾向がある。つまり、教員は High Stakes テストでの評価をあえて高めるために、テストのための勉強に時間を割くからである。High Stakes ゲームである。こうした評価の向上は、教育の質や質の高い生徒数の上昇との高い相関を必ずしも伴うものではない。教育-学習の崩壊を通じて、High Stakes 評価は、基礎的スキルにストレスを加え、カリキュラムをより狭いものにしている。High Stakes 評価の否定的評価の一つは、評価に関する広範囲の議論から始まった。他の評価では、教育-学習により密接に寄り添った授業内評価への需要が増加した。評価のマイナス面を最小化し、肯定的な面を最大化するためには、生徒を様々な側面から評価し総合することが必要である。教員は、たった一つの High Stake テストで生徒を判断することに十分な信頼を置いていない。生徒を判断するには、複数の指標を用いることが重要である。長期的な成功の鍵は、肯定的な成果を強化し、否定的な結果を最小化する文化を作ることが重要である。「複数の Low Stakes テスト +  $\alpha$  (学力外諸要因) > 1 つの High Stakes テスト」という式が成り立つことができるはずである。多様な集団に応じて、複数の Low Stakes テストの開発と実施。大学入学有資格者認定指標 (College Eligibility Index)の開発と採用。カレッジレディネス (College Readiness)の形成プログラムの開発と実施。日本では、グローバル化時代のプ

ラットフォームの形成を念頭に置きつつ、高大接続の未来を具体的にシミュレーションすべき時であり、スピードが求められる。

参考文献：

- 1) Ono=Descombes, Yasuko (2010), 「フランスの大学と受験システム」、VIEWS 2010 年夏号 (第 22 号)、2010.
- 2) 川口マーン恵美 (2011)、 「出る杭を伸ばしてやるドイツの教育 卒業試験が大学入学資格試験をも兼ねる「アビトゥーア」とは?」、現代ビジネス、2011/10/21.
- 3) 田中義郎 (2010) 「学力と文化リテラシー」、内外教育第 6016 号、2010 年 8 月 20 日
- 4) 田中義郎 (2011) 「繁栄への道 (Pathway to Prosperity) - ハーバード大学プロジェクト」、月刊教職研修、2011 年 5 月。
- 5) 田中義郎 (2011) 「大学改革の新戦略：ヘリコプター・ペアレント - 教育における世界同時多発現象を見る -」、週刊教育資料、日本教育新聞社、NO. 1180、2011 年 10 月 10 日。
- 6) 田中義郎 (2012) 「グローバリゼーションと大学入試 - 多様性と可能性の評価が未来を創る」、教育学術新聞、第 2470 号、2012 年 2 月 1 日。
- 7) 田中義郎 (2012) 「アメリカの才能児・生徒教育——伝統的平等主義の今日的理解と今後の課題」、比較教育学研究 45 号「特集:各国の才能教育事情」編、日本比較教育学会、東信堂、2012 年 6 月。
- 8) 田中義郎 (2012) 「高大接続問題の新たな展開に向けて - 「選択のための支援基盤」の創造」、教育学術新聞、第 2502 号、2012 年 11 月 7 日。
- 9) 冷泉彰彦 (2010)、 「激化するアメリカの大学入試事情」、ニューズウィーク 日本版、2010/04/23.
- 10) Graeme Paton (2012), “GCSEs axed in favour of ‘English Baccalaureate Certificate’”, The Telegraph, 2012/09/17.
- 11) R.L. Linn (Chair), “Effects of High-Stakes Educational Testing on Instruction and Achievement”, symposium presented at the annual meeting of the American Educational Research Association and the National Council

on Measurement in Education, Chicago, April 5, 1991

12) 劉海峰(2011)、「中国大学入試制度と基礎教育の関係について」、Science Portal China (第55号：中国の初・中等教育の現状と動向)、2011年4月20日。

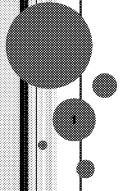
13) Yoshiro Tanaka(2011), “Globalization and Strategic Planning of Higher Education in Japan and Asia-Pacific”, College Board’s International Symposium, October 26, 2011, College Board, New York

14) Yoshiro Tanaka(2012),” Building bridges through education: Experience/Role of Universities – Globalization and Strategic Planning of Higher Education in Japan”, University of Upper Austria, 2012/11/20, Austria.

15) Yoshiro Tanaka(2012),” Re-examining Access, Equity and Capacity in Japanese Higher Education in the age of 21<sup>st</sup> Century Skills - for the Development of Assessment Tools and Technologies for 21<sup>st</sup> Century Skills is an Urgent Global Order” WERA 2012:World Education Research Association, University of Sydney, Australia, 2012/12/03, Australia.

## <補足資料1>

入学者選抜研究機構  
入試評価部門：  
第6プロジェクト：諸外国の入試制度の調査と評価  
「グローバリゼーションと大学入試」



田中義郎  
◎ 研究成果報告会 2013/03/14

### 研究の目的・意義

特に、北米および環太平洋地域に着目し、論点設定に主眼をおいた。

- ・ 高大教育接続のグローバル性の検証、
- ・ アドミッション・ポリシーの比較国際政策研究、
- ・ 諸外国における革新的制度の健全性および有効性の検証、
- ・ 研究者および行政官から構成されるプロフェッショナル・ネットワークの構築、
- ・ カレッジアドミッションにおける世界同時多発現象の検証、

を念頭に、国際セミナー等の開催を通じて、論点に対する多面的価値・視点の抽出、外国調査による情報収集、および国際議論を通じて論点整理・確認などを行う。適切な論点の抽出とそれに伴う問題の解決に向けて適切なアプローチ発見のための基盤研究。

2

### >> 第6研究プロジェクトの起点

- 第6プロジェクト、「グローバリゼーションと大学入試 — 多様性の可視化とテスト政策、そしてカレッジアドミッション」は、アーネスト・ボイヤーの言葉から始まった。
- 2012年10月31日 中教審高大接続特別部会にて依頼により報告、「高等教育のグローバリゼーションと大学入試」。

3



Dr. Ernest Boyer (アーネスト・ボイヤー博士)、カーネギー教育振興財団理事長

カレッジアドミッションの研究は社会・文化政策研究である。

- 25年前の1988年1月、田中は、米国プリンストンにあるカーネギー教育振興財団を訪ね、アーネスト・ボイヤー (Ernest Boyer) 理事長(1928 -1995)へのインタビュー調査を行った。

⇒ アメリカ社会の教育観、テスト文化は、基本のところでも今もなお変わっていないようである。それは、多様性の可視化とテスト政策、そしてカレッジアドミッション。  
⇒ それは、同時に、多様化のシンボルとしての”グローバリゼーション”。

5

それでは、我が国では、

- 「大学入試」は、何に答えようとしているのか？
- そして、何に答えていないのか？ Why?

同時に、

- 「大学入試」は、何を測ろうとしているのか？
- そして、何を測っていないのか？ Why?

● 更に、「高大接続問題は国際問題でもある！」という視点。

- これらが、第6プロジェクトが目指した研究の方向性である。

6

大学生に期待するイメージ >>>

- Dream Big! 大きな夢
- Have Fun! 人生を楽しむ
- Work Hard! 一生懸命
  
- しかし、現実は……………
- 日頃、日常生活に特段の不満を持っていない若者たち  
さらに、学力不振を問題視しない若者たち
  
- >>>彼らにとっての高等教育に何らかの積極的価値  
(欲求)を認めうる工夫が必要

7

「知識基盤社会」の特長として

- (1) 知識には国境がなく、グローバル化が一層進む。
- (2) 知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる。
- (3) 知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる。
- (4) 性別や年齢を問わず参画することが促進される。など。

8

「知識基盤社会の高等教育」を考えるにあたって、

- グローバル化 ⇒ ダイバーシティ(多様化)が進行  
↓
- 大学入試のマーケットは国際的に拡大する。
  
- そこでは、グローバルマーケットとしての学生移動基盤(Student Mobility Platform)というモデルが必要!

9

IIE FACT から、留学生主要受け入れ国。  
留学生総数 2,302,214

- 留学生数(2009):

1. アメリカ	671,616	5. 中国	238,184
2. イギリス	415,585	6. オーストラリア	223,508
3. フランス	266,448	7. カナダ	123,901
4. ドイツ	239,143	8. <u>日本</u>	<u>123,829</u>

他、

\* 中国の国内大学生総数は、3,100万人(2010)、2005年時の35%増

10

OECD諸国の留学生受け入れの動向: インドに選ばれない日本  
アジア地域の学生が全世界の留学生の43%を占める(UNESCO)

- 世界の主要な留学生送り出し国(2008): 日本における留学生受け入れ(2008):

● 1. <u>中国</u>	510,842 (20%がアメリカへ)	1. <u>中国</u>	72,766
● 2. <u>インド</u>	184,801 (56%がアメリカへ)	2. <u>韓国</u>	18,862
● 3. <u>韓国</u>	115,464 (65%がアメリカへ)	3. 台湾	5,082
● 4. ドイツ	94,408	4. ベトナム	2,873
● 5. トルコ	65,459	5. マレーシア	2,271
● 6. フランス	63,081	6. タイ	2,203
● 7. ロシア	58,983	7. アメリカ合衆国	2,024
● 8. 日本	52,849	8. インドネシア	1,791

11

こうした状況を踏まえて、

- グローバル化の視点に立って人材育成することと大学入試について

  1. 教育を取り巻く今日状況
  2. カレッジレディネス(College Readiness)に着目し、形成を促す
  3. 大学入試 ≠ カレッジアドミッション (College Admission)
  4. 大学入試の未来展望
  5. その他の論点

12

### 1. 教育を取り巻く今日の状況

- 今や、学校教育の目標は、単なる学習支援や社会的人間の形成にのみあるのではない。むしろ、若者たちが如何に学校教育を活用して、豊かな職業生活への価値ある移行をできるように手助けできるか、がその目標に内包されなければならない。
- わが国では、2011年度から実施されている新しい学習指導要領で、これまで以上にキャリア教育の推進が求められている。

13

### 21世紀のために、(アメリカの場合)

- 2011年2月、ハーバード大学教育大学院は、繁栄への道(Pathways to Prosperity)と題したプロジェクト報告書を発表した。副題には、「21世紀のために、アメリカの若者たちの教育目標を達成する」と書かれている。
- 中等教育では、多くの若者たちが大学進学か、就職するか、極めて限定された選択肢の中で育てられている。様々な職業で必要とされる知識や技能の間の関係は、今日、それほど大きな隔りがあるわけではない。専門職では、むしろ、相互横断的に似通った能力が期待されることも多い。それ故、彼らの学びは、結果的に似通っており、むしろその関係の繋がりこそが重要である。⇒ GPS (General Purpose Skills) = 21st Century Skills

14

加えて、グリット＝不屈の精神、気概の大切さを説く研究者たちは、

- この用語(Grit)に、自己訓練、粘り強さ、熱意の意味を込める。
- 学業の未達成者たちは、不適切な教師、つまらない教科書、大人数のクラスを避難する。しかし、研究者たちは、彼らの知的可能性を失墜させる別の理由を提示する。それは、自己訓練の失敗である。
- アメリカの若者たちの多くは、長期的な利益のために短期的な快楽を犠牲にできるか、と言う選択で困難を抱えている。自己訓練プログラムは、学業達成を成し遂げる上で、重要である。

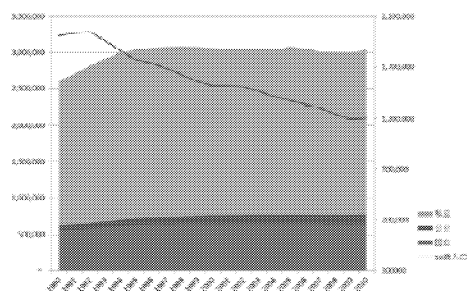
15

### 2. カレッジレディネス(COLLEGE READINESS)に着目し、形成を促す

- わが国の大学入学者選抜では、現在、年齢人口の半数以上が大学・短大に進学する。その中で、学力試験を経て大学に入学する者は50%台に留まり、推薦・AO入試などの非学力型選抜の割合は40%を超える。少子化のなかで受験競争の緩和に伴い、競争の弊害を問う声はむしろ後退し、いまや学生の学力低下、進学準備不足を憂う声が大きい。
- 多くの若者が大学教育の機会を享受できることは理想である。だが、「元来、高校も大学も共にこれほど多くの学生を送り出し、また受け入れる機関として想定されたものではなかった。」が故の困難がある。

16

### 大学(短大・学部・大学院)学生数の推移



出典: 荒井克弘作成図(2011)

17

### 国際社会人材基礎力 (多国籍企業を中心に)

多国籍企業人事担当者が採用に際して期待する力:

- Read (自分の考えと結びつけながら読む(鵜呑みにしない)ことができる。)
- Question(自分の考えとの違いに対して質問や疑問を適切に設定することができる。)
- Analyze(自分の考えと他の考え・視点と比較して分析することができる。)
- Communicate(比較や分析を通じて行った自分の判断を伝えることができる。)

18





まず、大学全入の意味の確認……

- 希望者が全員入学できるだけの収容力があること。
- Admission without any selection (選抜なき入学考査)
- Non-selective Access (選抜のない進学)
- Open Access (誰にでも開かれた進学)
- しかし、選抜のない進学(Access without any choice)はない。皆、何かを選択している。

⇒ 選抜は機能していないが、選抜はなされている。  
“選抜のための支援基盤”の整備が必要である！

25

論点) 大学入試の社会的責務(アカウンタビリティ)

- 文化的背景が違う様々な卓越性と如何に向き合うか？
- 「教育の目的は、共通の成果の追求ではなく、個々の能力の育成であるという認識」と如何に向き合うか？

一方で、

- 社会的責務(Social Duty)と如何に向き合うか？  
⇒ 高等教育は、No Child Left Behind!の対象か？！  
⇒ Higher Education for All!は？高等教育は社会インフラになれるか？

26

論点) わが国の「学力」という思想？！

- 「5教科7科目の試験で学力は測れる」、という思想

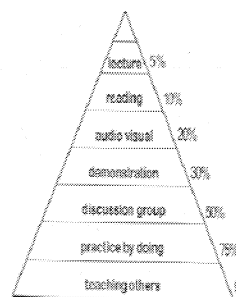
>>これは、わが国固有の学力思想であるが、諸外国には、それぞれに異なる学力思想(イギリスのAレベル、ドイツのアビトゥーア、アメリカのSATやACT、韓国のCSATなど)

⇒ 国によって違う「学力」という思想、と如何に向き合うか？

27

THE PRINCIPLES OF LEARNING (学習の原理)

- 講義を聞く 5%
- 読むこと 10%
- 視聴覚を利用する 20%
- デモンストレーション(実演)をする 30%
- グループ・ディスカッションで学ぶ 50%
- 体験的に学ぶ 75%
- 他人に教える 90% ⇒コミットメント!



出典：National Training Laboratories, Bethel, Maine

28

たとえば、IBは、「プログラムの教育力」を重視！

- 国際バカロレア資格(International Baccalaureate)は、スイスの財団法人国際バカロレア機構(Organisation du Baccalaureat International)の定める教育課程を修了する(=大学入学資格認定)と得られる資格である。
- 2010年時点で、全世界139カ国の3086校の学校で採用されている。
- 世界の著名な大学を含め、122か国以上、1764の学校で認められている。

29

わが国では、センター試験の影響力は大きい。もし、センター試験が変わるとした場合、それは、誰の為の、何の為のセンター試験か？

- センター試験を選択してくれた人たちのデータはあるが、センター試験を選択しなかった人たちのデータはない。
- “Open Access”の時代の入試研究には、新たな高等教育時代を拓くために、実は、センター試験を選択しない集団についての研究が不可欠である。
- その中には、多様な、グローバルな集団(留学生を含めて)の研究が不可欠！
- 同時に、国際比較を含む入試政策研究も重要である。

30

- 「何のため」の新しい入試か？
- 大切なのは、「どんな入試を作るか？ではなく」、まず、「何に使うか？である」。
- 「その入試が誰にとって、何にとって有益なのか？」が前提とならなければならない。

31

たとえば、……など

- グローバル化時代とは、多様な価値が開花時代であり、
- 高等教育への進学率の高まりは、排除(=Selection)の為の選抜型試験から共創(=Collaboration)の為の入学資格認定型アセスメントテストへとシフトする
- その場合、The Examination から An Examination へ現実的に展開
- 理科・数学は、選抜型で、しかし、国語・英語は資格認定型かどうか？ 韓国の場合？ ⇒英語は資格試験化で、実験中。

32

「変化」のための論点として：  
「新しい入試」のデザインを考えるに当たって、

- High Stakes Test のマイナスの連鎖から抜け出すと言う視点が大切なのではないか？！

\* low-stakes (anytime, anywhere) or high-stakes (secure testing center)

33

周知のマーチン・トロウのモデルで考えてみると、

- 高等教育のマス・ユニバーサル化が実現するには、「アテンダンス(就学)」ではなく、「アクセス(機会)」のマス・ユニバーサル化が重要であり、
- それは「参加(Participation)」によって実現する。」

⇒ それを可能にするのは、ICT (Information and Communication Technology) の発達であり、学習社会化はそれによって現実のものとなる。

34

しかし、疑問が生まれる。

- 高学歴人材の社会需要の高まりに呼応して、果たして人々(学生)は学習意欲を高めるだろうか？
- 学生が真の学習者になるための条件は何か？
- 重要なのは、新しい入試を可能にする条件基盤(ICTを含む)が、人々(学生)の学習意欲を高めるための役割を担えることである。

35

- 日頃、日常生活に特段の不满を持っていない若者たちが、高等教育に何らかの積極的価値(欲求)を認めうる工夫が必要なのであって、それは、必ずしも入学試験の世代交代による工夫を意味しない。

- むしろ、「無入試(入試なし)」を前提とする新たなインターフェースの創造と新たな高等教育ビジョンの構想がそれを後押しする可能性もある。⇒アメリカのコミュニティカレッジモデルの可能性は？！

36

## HIGH STAKES TEST の弱点からの転換

- こうした時代に、「新しい入試や入試制度」はもちろん、それを支える「ICT基盤」の議論はどうあるべきか。
- 新しいテストの開発が、High Stakes テストの世代交代：第一世代(共通一次試験)、第二世代(センター試験)、第三世代(PISA型新テスト???)しか意味していないのであれば、時代の需要に果たして応えているとは言いがたいのではないか？

37

- ご存知のように、“High Stakes Test”とは、「大変なものがかかっているテスト」という意味である。一般に、テスト実施者(ユーザー)、つまり学校や大学がそのようなテストに基づいて行う学生の振り分けや、卒業資格および入学許可の判定、に利用される。
- 一方、「日々の学習診断」のためのテストは、Low Stakes Testと呼ばれる。

\* high-stakes-いちかばちかの a high-stakes contest / のるかそるかの競争 ...

38

## コロラド大学のDR. LINN等の指摘

- High Stakes Testは、その社会的意味故に、教師を学力競争に巻き込み、(テストで高得点を上げるための準備に駆り立てるために)、学生たちの実際の学力を誇張しがちである。そして、基礎技能を軽視し、カリキュラムを意図的にテスト内容に傾斜して構成する傾向が生じる。
- テストの持つ否定的な側面を回避するには、できる限り、様々な測定ツールが利用されることが求められる。学力診断はもちろん学生のパフォーマンス評価には、判断基準となる複数の指標が必要であり、複数の学習診断テストの継続的利用が有効である。

39

## 「参加」を支える学習診断型LOW STAKES TEST

- その場合、「世代の交代」でなく、「ビジョンの交代」が求められる。
- 高次の学習社会への移行を促進しようとするれば、人々の大学への参加がむしろ促進されねばならない。
- その場合、機能分化は不可欠である。知識基盤社会における高次思考技能(Higher Order Thinking Skills)人材の育成を担う機関と、汎用的技能(General Purpose Skills)人材の育成を担う機関の種別化はむしろ進行することになる。
- とはいえ、それは“Low Stakes”でこそ、意味がある。たとえば、“資格試験型テスト”の開発。

40

## 選抜入試型から参加許可認定型への移行

- すなわち、それは「参加 (Participation)によって実現する。」

### ◎試験の種別化として見ると:

- 入学前に選抜型入学試験(Entrance Exam – Before Enrollment) (従来の選抜型入学の場合)
- 入学後に科目履修許可型認定テスト(Placement Test – After Enrollment) (開放制入学の場合) →アメリカのコミュニティカレッジ等でよく見られる

41

## 更に、

しかし、実際、「GPAとテストスコアだけでは、個々の学習者の適性はわからない。」という現実とどのように向き合うか？

・・・実際、大学生活での成功には多様な要素が含まれている。・・・

・・・アメリカの事例から要素を抽出してみると、・・・

42

進学力 ⇒ 大学入試の準備 ⇒ 合格へ!++++ さらに登録 ⇒ 大学入学の準備 ⇒ 参加へ! +++ さらに

## 大学で活躍する力

**メタ認知の力(3):**

- ・目標を意識して行動する力
- ・計画を立てる力
- ・自己観察(モニターする)力

**感情を起こす力/動機付けの力(6):**

- ・目標達成のために奮闘する力
- ・リスクを負う覚悟(チャレンジする姿勢)
- ・自己効力感(自分の可能性を信じること)
- ・不安方(目標が高いと、不安は高くなる!!!)
- ・粘り強さ(辛抱強く続ける姿勢)
- ・立ち直る力(回復力)

**人間関係の力(3):**

- ・チームワーク力(チーム内で連携できる力)
- ・協働力(目標の為に同等の立場で協力して共に働く力)
- ・寛容さ(自分とは違うものと自然体で向き合える力)

**高感度 × 肯感**

メタ認知とは? : 自分の思考や行動そのものを対象として、客観的に把握し認識する力。  
(田中義郎作成、2012)

## HIGH STAKES TEST からLOW STAKES TESTへ

- ・「ICTを活用すれば、Low Stakes Test がむしろ威力を発揮するのではないか?」とも思える。
- ・少なくとも、ICTは、教授活動に不可欠な効果的なフィードバックによって、選択と決定を可能にする。
- ・さらに、様々なLow Stakes TestやGPA等の学習成果情報の組み合わせによる有資格者認定指標(Eligibility Index)を導入することで、High Stakes Testの過度の弊害を調整することが可能となるのではないか?

44

カリフォルニア州立大学(CSU)の入学有資格者認定指標 (COLLEGE ELIGIBILITY INDEX)

$(HSGPA2.95+ACT11+SAT540) == (HSGPA2.29+ACT24+SAT1070)$

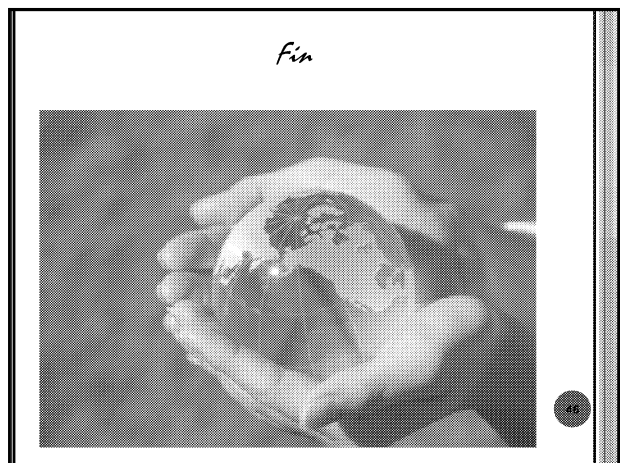
**CSUMentor**

Eligibility Index - California Residents

Eligibility Index Table for Residents of California or Graduates of California High Schools

GPA Score	ACT		SAT		ACT		SAT	
	Score	Rank	Score	Rank	Score	Rank	Score	Rank
2.79	10	212	1,056	17	790	223	23	1040
2.88	10	200	1,060	19	758	232	23	1034
2.87	10	200	1,061	19	758	231	23	1034
2.90	11	190	1,069	17	699	229	24	1030
2.92	11	182	1,072	19	670	229	24	1026
2.94	11	180	1,071	18	678	228	24	1026

45



## <補足資料 2 >

### 入学者選抜研究機構入試評価部門第6プロジェクト： 諸外国の入試制度の調査と評価 2010-12 年度報告

#### \*研究の経過：

#### ◎ 2010年度：

2010年度は、高等教育の拡大により、入試だけにとらわれない、新しい進学方式を視野に入れた、新たな接続のシステムが模索されている。そこで諸外国における高等教育システムの全体と各教育サブシステムの中身（入学・進学等）について、調査・分析を進めた。具体的には、北米、EU 諸国、アジア、オセアニアにおけるアドミッション・ポリシーに着目し、高大教育接続における入学者選抜制度の健全性、有効性を調査、評価し、比較国際アプローチによる政策研究を行った。

#### NO. 1

- ① 開催日時：2009年11月13日
- ② セミナーの名称： Choosing College Students -Access, Equity, and Quality
- ③ 講師等の氏名・所属：

Coordinator: Dr. Yoshiro Tanaka (NCUEE-OSCA)

Speakers:

Dr. John Douglass (UC Berkeley, U. S. A.)

Dr. Kent Cheng (National Chung Cheng University, Taiwan)

Dr. Katsuhiko Arai (National Center for University Entrance Examinations,  
Japan)

Discussant:

Dr. Deane Neubauer (University of Hawaii, East-West Center)

#### NO. 2

- ① 開催日時：2010年3月17-21日
- ② セミナーの名称：「グローバル化とカレッジ・アドミッションを巡る研究の理論的枠組みの構築」に関する集中討議
- ③ 講師等の氏名・所属：

Dr. John N. Hawkins (UCLA, East-West Center)

Dr. Deane Neubauer (University of Hawaii, East-West Center)

### NO. 3

- ① 開催日時： 2010年6月3日
- ② セミナーの名称：「EUにおける高等教育改革の動向 –ボローニャ・プロセスを中心として。大学入学者選抜の現状の議論を含む」
- ③ 講師等の氏名・所属：  
木戸 裕 氏 （入学者選抜研究機構客員研究員、高崎経済大学講師、  
元国立国会図書館専門調査官）

### NO. 4

- ① 開催日時： 2010年12月21日
- ② セミナーの名称：「フランスにおける高大接続の現状と改革動向」
- ③ 講師等の氏名・所属：藤井 佐知子 氏 （宇都宮大学教育学部教授）

### NO. 5

- ① 開催日時： 2011年2月24日
- ② セミナーの名称：「21世紀の高等教育アドミッション –日本の大学の課題と展望およびプロフェッショナリズムの可能性を秘めた志望者の選抜、特に医学部への入学」
- ③ 講師等の氏名・所属：  
佐藤禎一 氏（国際医療福祉大学、学事顧問、大学院教授）

### NO.6

その他：2010年6月19日

記念国際シンポジウム 大学入試センター入学者選抜研究機構／朝日新聞社教育事業センター  
発足記念国際シンポジウム『これからの大学入学者選抜の意味を問い直す』を、東京ビッグサイトで開催し、「アメリカは初中等教育と高等教育の間の“溝(Chasm)”に橋をかけることができるだろうか?」、ETS エイミー・E・シュミット (General Manager-College Board & HE Programs, Educational Testing Service (ETS) ; 「OECD諸国における大学政策の動向」、佐藤禎一 (国際医療福祉大学大学院教授、元ユネスコ日本政府代表部特命全権大使)、; 「日本の大学入学者選抜」、天野郁夫 (東京大学名誉教授)、「新たな大学入学者選抜の構想」; 荒井克弘 (大学入試センター 入学者選抜研究機構) を行った。司会進行は田中が担当した。

◎ 2011年度：

2011年度は、特に、北米に着目し、問題の設定に主眼を置いた。

- ① 高大教育接続のグローバル性の検証、
- ② アドミッション・ポリシーの比較国際政策研究、
- ③ 諸外国における革新的制度の健全性および有効性の検証、
- ④ 研究者および行政官から構成されるプロフェッショナル・ネットワークの構築、
- ⑤ カレッジアドミッションにおける世界同時多発現象の検証、

を念頭に、国際セミナーの開催による問題に対する多面的価値・視点の抽出、外国調査による情報収集および国際議論を通じて論点整理・確認など、を行っている。的確な課題の抽出と問題の解決に向かう妥当なアプローチの発見のための基盤研究を行った。

2011年5月11日（水）、第6プロジェクトの研究会（於：大学入試センター）として、銭谷眞美氏（東京国立博物館長／元文部科学事務次官）をお招きし、「我が国の初中等教育政策と大学入試」についてご講演を頂き、我が国の大学入試政策に関する理解を深めた。

2011年10月1日（土）、第二回入学者選抜研究機構セミナー「大学入試を考える ～全入時代に入学者選抜は必要か～」（於：日本教育会館）の中で、田中は、「高等教育のグローバル化と大学入試」を報告した。この理解、認識を下に、機構と研究協力関係にある米国カレッジボードの招聘に応じて、田中は、Global Education Symposium (at 2011/10/26 College Board Forum in New York)に参加協力をを行い、報告を行った。

2011年11月18日（金）には、UCLA=CRESST(米国)、ACT,Inc. (米国)、KICE (韓国)の協賛を得て、2011国際シンポジウム「教育テストの可能性 -21世紀型能力の育成と高大接続」(於：有楽町朝日ホール)を行い、米国より3名(UCLA より米国科学アカデミーのベーカー教授他1名、韓国 KICE より NEAT(国家英語能力評価試験)の開発責任者の一人 JIN 博士、そして、日本の初中等教育政策の観点から大学入試についての議論を銭谷眞美元文部科学事務次官にお願いし、計5名の研究者および有識者で、そして、本機構より1名が指定討論者として荒井克弘機構長が加わり、21世紀におけるテストと教育について討議した。

さらに、2011年12月22日（木）、第6プロジェクトの研究会（於：大学入試センター）として、プロジェクト研究会（センター内および第6プロジェクト客員研究員対象）を開催し、「AP 日本語の設計と開発 ―開発メンバーの視点から」のテーマで、松田結貴米国メンフィス大学准教授（2011年度第6プロジェクト客員研究員）にご講演を頂き、研究を深めた。

その他、研究開発としては、米国カレッジボードが開発し、ETS が実施している AP(Advanced Placement)をモデルとして、College Eligibility Index の開発のための研究をおこなっている。開発イメージとしては、仮称として、College Ability Profile Assessment Programs (CAPA)、日本版 AP Tests & Programs、Programs for Connecting Students to College and Career Success (CCSP = College & Career Success Programs)、日本版アカデミック・ポートフォリオ等に着目し、日本はもちろん、少なくとも全アジア太平洋圏を網羅できる高等教育の新たなグローバル・プラットフォームの構築に貢献できることを念頭に置いている。

#### ◎ 2012年度：

2012年度は、2011年度の研究の基礎の上に、College Eligibility Indexの政策的利用、およびシステム化の効用として、望ましい高大接続を実現する背景となるアメリカにおける初中等教育における質保証政策New Assessment for the Common Core State Standardsの現状把握を行った。また、カリフォルニア高等教育マスタープラン、コロラド州立大学システムにおける学生移動とEligibility Indexの活用を中心に検討を行った。グローバリゼーションとはダイバシティ（多様化）である。人口減少社会の進む道は、人材の多様化、多様な人材の集団に変わるという道である。そこでは、コラボレーション（協力）が尊ばれ、新しい言葉では、協働とか協創という言い方もある。産業界では、業界、業種の再編成が進行し、新たな業界、業種が誕生する。

2012年9月8日（土）、第三回入学者選抜研究機構セミナー「大学入試を考える ～新しい試験の開発～」（於：NTT データ駒場研修センター）の中で、コメンテーターとして、田中は、「世代交代からビジョンの交代へ」と題して、High Stakes Test のマイナスの連鎖から抜け出し、Low Stakes Test の効用にもっと着目し、テスト環境の現代化によって、テストは学習者の学習の質的向上にとって一層意味のあるものになるべきであると主張した。

2012年10月31日（水）、中教審高大接続特別部会のヒアリングでの報告で、田中は、「高等教育のグローバリゼーションと大学入試」を題して、話題提供を行い、入試に依存する選抜



型進学は徐々に後退し、成熟したリテラシーの形成に裏付けられた教育接続による進学が主流となり、その場合、“個人の高みを目指す”を支える高大接続の多様性の保証が、学校教育システムの有効性を左右することになることの議論を踏まえて、様々な Low Stakes Test や GPA 等の学習成果情報の組み合わせによる有資格者認定指標(Eligibility Index)を導入することで、High Stakes Test の過度の弊害を調整することが可能となるのではないかと。高大接続は新たな段階に進まねばならないことを主張した。

2012年11月18日(日)、2012国際シンポジウム「グローバル化時代に大学入学者選抜の未来を考える -日本の21世紀ビジョンと高等教育マスタープランの策定」(於:有楽町朝日ホール)を行い、米国より2名(Dr. John Douglass カリフォルニア大学バークレー校高等教育研究所上席研究員、Dr. Jack Scott カリフォルニア州コミュニティカレッジシステム名誉総長)、国内より2名(佐藤禎一元文部次官、常盤豊文部科学省高等教育担当審議官)の計4名の研究者および有識者、行政官をお招きし、そして、本機構より1名(荒井克弘機構長)が趣旨説明として加わり、グローバル化時代に大学入学者選抜の未来を考える、を行い高等教育の21世紀ビジョンと大学入試政策の展開について討議した。

2012年11月20日(火)には、University of Upper Austria, Linz の招聘により、“Building bridges through education: Experience/Role of Universities - Globalization and Strategic Planning of Higher Education”に参加し、田中は、グローバル化時代の大学アドミッションと学生モビリティの関係、高等教育の国際基盤構築の重要性について、講演した。

2012年12月3日(月)、2012(WERA: World Education Research Association)の世界大会@University of Sydneyにおいて、シンポジウム(New Directions in Improvement of Education Quality)に招聘され、“The Development of Assessment Tools and Technologies for 21<sup>st</sup> Century Skills is and Urgent Global Order”の中で田中は、“Re-examining Access, Equity and Capacity in Higher Education in the age of 21<sup>st</sup> Century Skills”の報告を行い、グローバリゼーションの中で期待される21世紀スキルの獲得と高大接続で測られる諸能力との関係の議論について、報告を行った。

また、前後するが、第6プロジェクトの3年間の総括として、田中は、「高等教育のグローバリゼーションと大学入試」を題して、2012年10月31日(水)の中教審高大接続特別部会で報告し、入試に依存する選抜型進学は徐々に後退し、成熟したリテラシーの形成に裏付けら

れた教育接続による進学が主流となり、その場合、“個人の高みを目指す”を支える高大接続の多様性の保証が、学校教育システムの有効性を左右することになることの議論を踏まえて、様々な Low Stakes Test や GPA 等の学習成果情報の組み合わせによる有資格者認定指標 (Eligibility Index) を導入することで、High Stakes Test の過度の弊害を調整することが可能となるのではないか？ 高大接続は新たな段階に進まねばならないことを主張した。

#### **\* 2 0 1 0 - 2 0 1 2 ( 3 年 間 ) の 研 究 成 果 に 関 わ る 国 内 招 聘 講 演 :**

- 1)田中義郎(2010)、「大学を RE-デザインする –直面する課題や将来のビジョンのヒントとして」大学みらい塾セミナー、2010年12月17日、於：大学コンソーシアム京都。
- 2)田中義郎(2010)、「グローバリゼーションと大学の質保証」、日本私立看護系大学協会 FD セミナー、2010年9月2日、於：アルカディア市ヶ谷。
- 3)Yoshiro Tanaka(2010)“Japan’s Approaches toward strategic global alliances in East Asia: Strengthening the Bridge in higher Education among nations “ EWC (East West Center) シニアリサーチャー・セミナー、2010年7月14日、於：東京。

#### **\* 2 0 1 0 - 2 0 1 2 ( 3 年 間 ) の 研 究 成 果 に 関 わ る 国 際 招 聘 講 演 :**

- 1)Yoshiro Tanaka(2011),“Globalization and Strategic Planning of Higher Education in Japan and Asia-Pacific”, College Board’s International Symposium, October 26, 2011, College Board, New York
- 2)Yoshiro Tanaka(2012),”Building bridges through education: Experience/Role of Universities - Globalization and Strategic Planning of Higher Education in Japan”,University of Upper Austria, 2012/11/20, Austria.
- 3)Yoshiro Tanaka(2012),” Re-examining Access, Equity and Capacity in Higher Education in the age of 21<sup>st</sup> Century Skills – for the Development of Assessment Tools and Technologies for 21<sup>st</sup> Century Skills is an Urgent Global Order” WERA 2012:World Education Research Association, University of Sydney, Australia, 2012/12/03, Australia.

**\* 2010-2012 (3年間) の研究成果に関わる著書、論文等 :**

- 1) 田中義郎(2010)、「カレッジ・レディネスを高める - 接続力を育む学習プログラムの開発が不可欠」、アルカディア学報 416、教育学術新聞第 2412 号, 2010 年 8 月。
- 2) 田中義郎(2010)「学力と文化リテラシー」、内外教育第 6016 号、2010 年 8 月 20 日
- 3) 田中義郎 (2011)「繁栄への道(Pathway to Prosperity) - ハーバード大学プロジェクト」月刊教職研修、2011 年 5 月。
- 4) Yoshiro Tanaka & Deane Neubauer(2011), *Access, Equity, and Capacity in Asia-Pacific Higher Education (International and Development Education)*, Palgrave Macmillan, New York.
- 5) 田中義郎(2012)「グローバリゼーションと大学入試 - 多様性と可能性の評価が未来を創る」、教育学術新聞、第 2470 号、2012 年 2 月 1 日。
- 6) 田中義郎(2012)「アメリカの才能児・生徒教育——伝統的平等主義の今日的理解と今後の課題」、比較教育学研究 45 号「特集:各国の才能教育事情」編、日本比較教育学会、東信堂、2012 年 6 月。
- 7) 田中義郎(2012)「高大接続問題の新たな展開に向けて - 「選択のための支援基盤」の創造」、教育学術新聞、第 2502 号、2012 年 11 月 7 日。
- 8) 田中義郎(2013 年予定)「世界の大学入試の趨勢」、金子書房。

**\* その他、入学者選抜研究機構の報告書等 :**

- 1) 入学者選抜研究機構報告書発足記念シンポジウム『これからの大学入学者選抜の意味を問い直す』、平成 22 年 (2010 年) 6 月。
- 2) 入学者選抜研究機構報告書 2 『大学入学者選抜 - 進学、機会の平等、そして質保証 -』平成 23 年 (2011 年) 2 月。
- 3) 入学者選抜研究機構報告書 6 『教育テストの可能性 - 21 世紀型能力の育成と高大接続 -』、平成 24 年 (2012 年) 3 月。
- 4) 入学者選抜研究機構報告書 9 『グローバル化時代に大学入学者選抜の未来を考える - 日本の 21 世紀ビジョンと高等教育のマスタープランの策定 -』、平成 25 年 (2013 年) 3 月。
- 5) (予定) 入学者選抜研究機構報告書 10 『グローバリゼーションと大学入試』、平成 25 年 (2013 年) 3 月。

## 第2部：

### 第6プロジェクトにおける 国際アドバイザーおよび客員研究員の最近の研究動向 (資料として)

この資料は、入学者選抜研究機構が発足した後、それぞれの立場で惜しみなく研究協力をして下さった、特に海外のアドバイザー(**International Advisors**)と客員研究員(**Guest Researchers**)の方々が機構の内部講演会で使用されたパワーポイント・スライドを掲載したものである。(国際シンポジウムでの講演やその資料は除く。) これらの方々の研究協力を得て、第6プロジェクトは、実り多い豊かな研究を遂行できたことに深く感謝する。

## Introduction to CRESST

Eva L Baker  
(Co-Director UCLA CRESST)

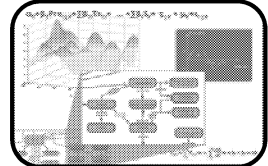
## Introduction to CRESST

Eva L. Baker, Co-Director  
UCLA CRESST

National Center for Research on Evaluation, Standards, and Student Testing  
March 7, 2013

## What Is CRESST?

- R & D at UCLA
- International reputation
- Innovative measurement, quantitative methods
- Formative and summative assessment
- Evaluation and accountability
- Technology assessment
- Learning systems, especially games and simulations



## CRESST

- A world leader in assessment design, evaluation, educational learning technologies, and advanced computational models
- Cutting-edge and policy-relevant R&D and evaluation for military, K-12, higher education, business, and medical education
- Experience in consortia planning, review training, simulation, game design, assessment development, and evaluation
- Products to assure cost-sensitive, rapid, and trustworthy results for decisions, and for scale-up
- Strong focus on diverse students from different language, economic, and cultural backgrounds

© Regents of the University of California

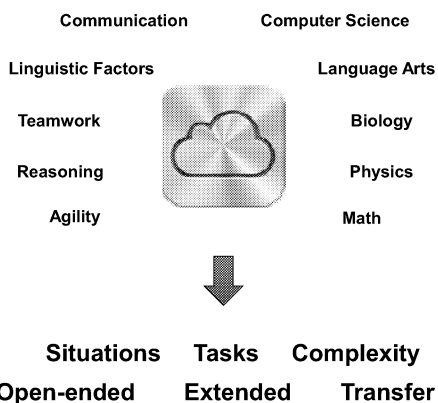
© Regents of the University of California

## Current Efforts

- Standards-based assessment design and validation for formative and summative uses
- Third-party independent data and analysis
- Design methodology
- Technology-based tests
- Complex human performance assessment
- Games and simulations (5 year old to adult)
- Comparability studies
- New approaches to validity; data mining; automated scoring
- Young children to adults, underperforming and diverse students
- Transitions to university and careers
- Health, medicine, military, public schools, IHE, portals
- Software tools for practitioners, policymakers, & scholars
- Tools development and validation



© Regents of the University of California



## The Past

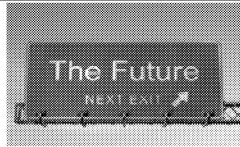
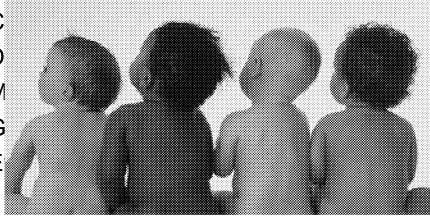


© Regents of the University of California

© Regents of the University of California

## Easy Predictions Hard Consequences

- New knowledge
- Technology
- C
- D
- M
- G
- E

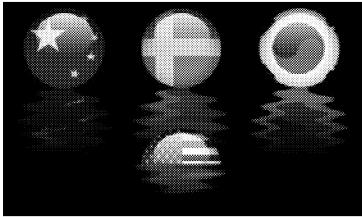


© Regents of the University of California

Average scores in NAEP science at grades 4, 8, and 12, by selected student and school characteristics: 2009

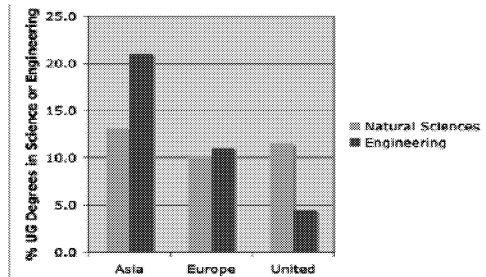
Race/Ethnicity	Grade 4	Grade 8	Grade 12
White	163	162	159
Black	127	126	125
Hispanic	131	132	134
Asian/Pacific Islander	160	160	164
American Indian/Alaska Native	138	137	144

© Regents of the University of California



© Regents of the University of California

## Science & Engineering



© Regents of the University of California

## Who Will Be the Learners?

- Expectations and experiences of age 30 and below people are far different than former generations: technology, social networks, simultaneous stimuli, narrative
- No intervening institutions, point-to-point connections, public, privacy!
- Real need for life-long learning

YouTube

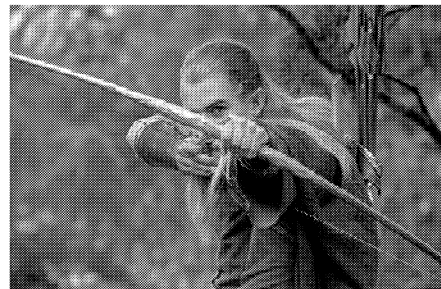
facebook

Google



© Regents of the University of California

## What Should Be Learned and Assessed and with What Evidence of Quality?



© Regents of the University of California

## Current Plan

- Common Core State Standards in Literacy, Math
- Consortia of States (SBAC and PARCC) supervise design and building of tests
- Pilot tests now
- Go into live in national trials in 2014
- Adopted and used in 2015

© Regents of the University of California

## CRESST Role in National Policy and Technical Quality

- Independent evaluator of alignment to standards' content,
- Reviewer of task cognitive complexity
- Developer of complex task models and scoring schemes
- Analysis of pilot data to make predictions for states, districts, and schools
- Reporting tools for multiple users
- Close interactions with consortia and users

© Regents of the University of California

## What's Different?

- Tests are supposed to be mapped to rigorous standards
- Test are supposed to exemplify deeper learning of complex skills
- Some tests will be computerized
- Some tests will be given at end of unit and "rolled up" for use as summative tests

© Regents of the University of California

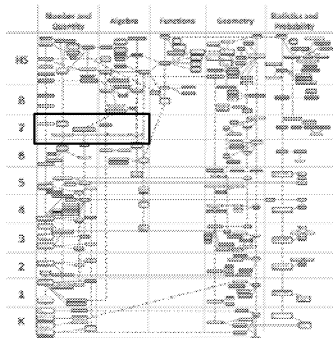
## Know that there are numbers that are not rational, and approximate them by rational numbers

CCSS. Math. Content.8.NS.A.1

- Know that numbers that are not rational are called irrational. Understand informally that every number has a decimal expansion; for rational numbers show that the decimal expansion repeats eventually, and convert a decimal expansion which repeats eventually into a rational number.

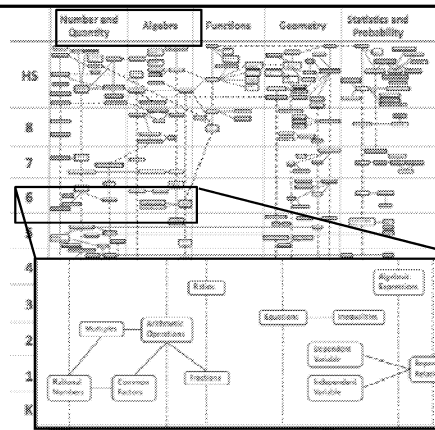
© Regents of the University of California

## Common Core Ontology



© Regents of the University of California

## Common Core Ontology



© Regents of the University of California

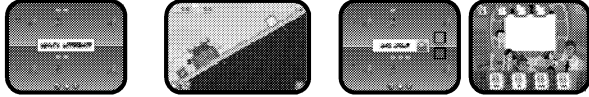




## Testbed Purposes

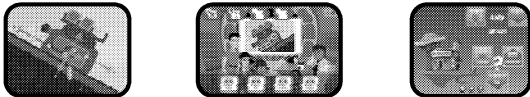
### 1. Model games that illustrate the desired pedagogy

Comparison using contrasting cases      Complex problem-solving through guided exploration      Active reflection through graphic prompts

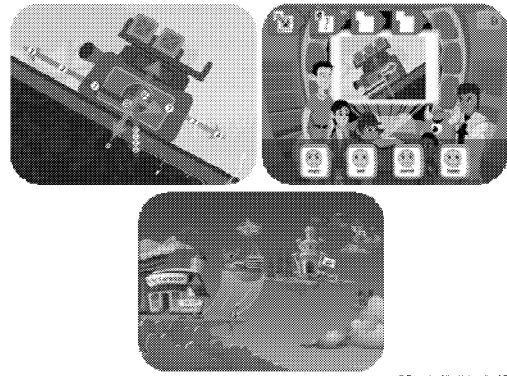


### 2. Test innovative learning and assessment game mechanics

Free body diagram to control motion      Physics and SEL integration      Graphical formalizations of underlying physics laws



## Examples Of 3 Testbed Games



© Regents of the University of California

## Game And Testbed Testing

Task	Setting	N	Status
Assessments	K-2nd grade students (afterschool program and summer school)	52	Tested between 5/2012 and 7/2012. Think-aloud and pilot testing with students, teacher review, and SME review. Data used internally to refine assessments.
RoboBall-Flash	K-2nd, 6th grade students (afterschool program and summer school)	71	Tested between 5/2012 and 7/2012. Data reported in assessment validation report and TA2 feedback reports.
RoboBall-Flash	Invited K, 1st, 2nd grade students	80	Tested 8/2012. Data reported in 10/2012 feedback report.
RoboBall-HTML5	Classrooms: K, 2nd, 3rd, 5th	100	Testing in process. Measures include pretest, posttest. Gameplay is 2 occasions x 20min/occasion. Data to be reported in 4/2013 feedback report.
GoVectorGo	Classrooms: K, 1st, 2nd, 3rd, 4th	277	Testing in process. Measures include pretest, 2 checkpoints, posttest. Gameplay is 3 occasions x 20min/occasion. Data to be reported in 4/2013 feedback report.
TeamVector, SEL-only, AlienDash	Afterschool program (grades K-5)	117	Usability testing in process. Technology shakedown. Data to be reported in 4/2013 feedback report.

© Regents of the University of California

## Game And Testbed Testing

"I liked it because I learned a lot."

"What I like about it was it has both learning and fun."

"I can really see how the kids need to use problem solving strategies to solve the game."

"I thought the games were fun and they really made me think about the right answers."

"I liked that it taught you how forces worked."

© Regents of the University of California

## Continued Validation Of Physics And SEL assessments

### Vector addition assessments

•Performance on the items can be explained by science factor and three substructures:  
 – problem-solving, explanation, transfer

### SEL assessments

•Most students correctly differentiated prosocial and antisocial stimulus scenarios (over 90%)  
 •Exploring two validity models using stringent and lenient scoring  
 •Older students had more correct responses for complex emotions and empathetic responses

© Regents of the University of California

## Crowdsourcing

- Using Amazon's Mechanical Turk for rapid first-pass feedback on the interpretation of icons and directions
- Developing CRESST website for testbed games (Amazon Web Service)
- In negotiations with BrainPop and Learning.com to host CRESST math games and physics games when ready
- iTunes App Store
  - "Go Vector Go"
- Designing crowdsourcing study now
  - Event triggers for adaptivity (resets, content, cognitive demand, formative assessment items)
  - Game accommodation after trigger (easier level, analogous level with highlighting/prompting to show key features or relationship)
  - Randomized designs with assessments

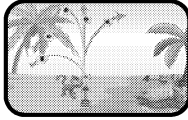
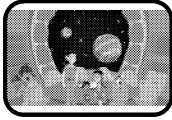
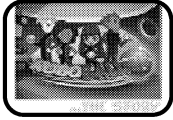
© Regents of the University of California

## Support For Classroom Integration

Storybook

Introductory movie

Post-game transfer tasks



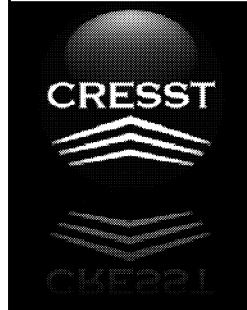
- Professional development for curriculum integration
- Testbed sandbox for teacher-led exploration
- Research partnerships

© Regents of the University of California

<http://www.cse.ucla.edu>

**Eva Baker**

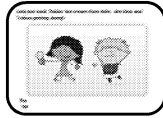
voice 310.206.1530  
email [eva@ucla.edu](mailto:eva@ucla.edu)



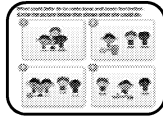
© Regents of the University of California

## Example Items

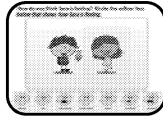
Scenario Differentiation



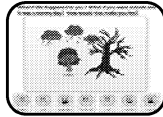
Empathetic Response



Identifying Emotion

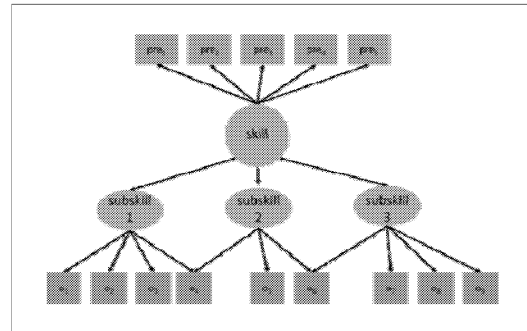


Perspective-taking



© Regents of the University of California

## Computational Model



Project update 5-10: Crowdsourcing

## How Will Assessment Operate?

- Multiple goals
- Adaptive
- On-the-fly
- Through multiple input/output channels
- Displaying transfer and generalization gradients
- Validity challenges

© Regents of the University of California

Improving Education Quality by  
Teaching and Assessing 21st  
Century Skills

Harry O'Neil  
(CRESST/University of Southern California)

## Improving Education Quality by Teaching and Assessing 21st Century Skills

Harry O'Neil  
 CRESST/University of Southern California

CRESST Brief  
 Los Angeles, CA  
 March 7, 2013

Yoshi 3-06-13 v1

1

## Why Are 21<sup>st</sup> Century Skills Important?

Yoshi 3-06-13 v1

2

## Changing World

- Longer lives
- Multiple careers
  - 3 or 4 over lifetime
- Globalization
- Urgent unforeseen societal problems will always spring up and need to be solved
- Problems and solutions will diffuse more rapidly because of technology and the media
- Problems will be very complex in unpredictable environments
- Companies need to be agile, innovative, creative

Yoshi 3-06-13 v1

3

## Are We Teaching What the World of Work Requires

- MBA professors vs. business managers
  - Australia study inverse relationship
- Content (knowledge doubles every 18 months in Engineering) vs. processes
- Korean PISA Story
  - Excellent PISA Science scores but other PISA data indicated that they data will not major in Science in college
- Demography

Yoshi 3-06-13 v1

4

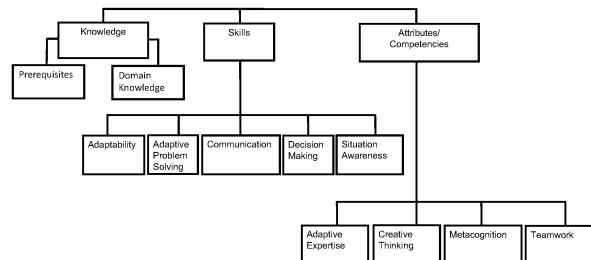
## 21st Century Learning Constructs Definition

- 21st Century learning skills involved the mental preparation (including knowledge, skills, and attributes) an individual needs to establish and sustain competent performance in the complex, and unpredictable environment. They are also named cognitive readiness skills.
- It enables one to perform successfully in environments that are unexpected, never before encountered, dynamic, open-ended, ill-defined and high stakes.
- In an information-rich environment, in the world of work where competition is sometimes complex and unpredictable, such skills should enhance success

Yoshi 3-06-13 v1

5

## A 21st Century Skills Learning Model



Yoshi 3-06-13 v1

6

## What Are the Possible Underlying Motivational 21st Century Skills?

- Motivation is defined by Woolfolk (2001) as “an internal state that arouses, directs, and maintains behavior” (p. 366)
- Resiliency
- Self-efficacy beliefs
- Risk assessment
- Effort
- Persistence
- Anxiety
- Engagement
- Interest
- Beliefs
- Attributions
- Goals
- Social partnership

Yoshi 3-06-13 v1

7

## How Motivation Works

Mayer, 2011 (p. 41)

Basis	Description	Example
Interest	Students work harder to learn material that has personal value to them.	I like this.
Beliefs	Students work harder to learn when they believe their hard work will pay off.	I am good at this.
Attributions	Students work harder to learn when they attribute their successes and failures to effort.	My success or failure on this depends on my effort.
Goals	Students work harder to learn when their goal is to master the material.	I want to learn this.
Partnership	Students work harder to learn when they view the instructor as a social partner.	We are working together to learn this.

Yoshi 3-06-13 v1

8

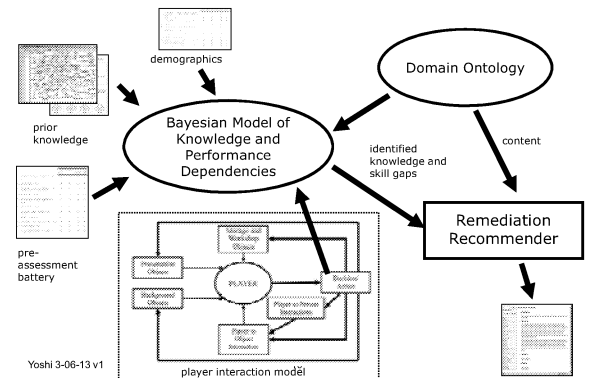
## Measurement of Motivation

- Use of PISA/OECD questionnaire
  - To measure self-efficacy, effort, test anxiety, and as traits
- Constructs analyzed via Confirmatory Factor Analysis (PISA 2000)
  - Marsh et al., 2006
- PISA (Program for International Student Assessment)
  - Testing program 40+ countries in math, literacy, science, problem solving, motivation
- Few state measures for diagnostic/remedial purposes
  - What are in scenario performance measures
  - State worry, state self-efficacy questionnaires

Yoshi 3-06-13 v1

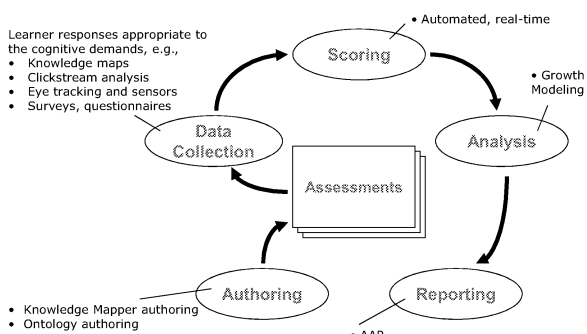
9

## 21st Century Skills Teaching Strategies



Yoshi 3-06-13 v1

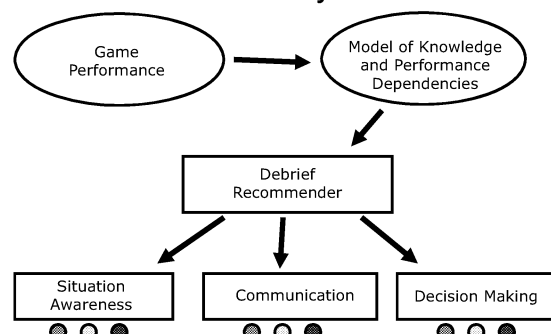
## Assessment Tool Kit



Yoshi 3-06-13 v1

11

## Debrief System



Yoshi 3-06-13 v1

12

## Measurement Issues

Yoshi 3-06-13 v1

13

## Vary Cognitive Differences of Game Levels to Test 21<sup>st</sup> Century Skills

- A construct validity approach
- Basic Level—relatively low need for cognitive readiness
  - Relatively low cognitive complexity
  - Primarily procedural
  - Limited decision making
  - One “best” solution
  - Multiple “adequate” solutions
- Advanced Level—relatively high need for cognitive readiness
  - High cognitive complexity
  - Multiple competing priorities
  - Unpredictable environments
  - No “best” solution
  - Many potentially “disastrous” solutions
  - Trained procedures/principles may not work. Creative solutions may be needed.

Yoshi 3-06-13 v1

14

## Research Test Beds

- Off-the-shelf games (SafeCracker)
  - Wraparound instruction and assessment strategies
- Develop own game (research test bed)
  - CRESST embedded instructional and assessment strategies in game
- Existing Navy simulations (MMTT)
  - Measure retention/transfer a la Mayer for Surface Warfare
  - Initial 21<sup>st</sup> Century Skills study conducted
- View game as a “test” or instruction

Yoshi 3-06-13 v1

15

## Traits vs. States

- Traits are considered stable characteristics of a person and are relatively difficult to change. A trait is a predisposition to manifest a state. Students are asked to describe how they generally think or feel.
- States refer to the manifestation of the traits in the situation. States (e.g., state worry) change in intensity and vary over time. Students are asked to describe either how they feel “right now” or how they felt while they were taking the test.

(Spielberger, 1975)

Yoshi 3-06-13 v1

16

## Map/Ontology

- An ontology is a conceptual representation of a domain expressed in terms of concepts and the relationships among the concepts
  - Supports getting expert knowledge, representing it, and sharing it
  - It is used in a number of fields outside of K-12
    - Medical, engineering, e-commerce, military
    - Software tools are available

Yoshi 3-06-13 v1

17

## Why Design Assessments Using an Expert Map or Ontology?

- Collaborate on detailed domains (ontologies) rather than on summary standards to guide instruction and testing practice
- Identifies “big ideas” or important outcomes because of its structure
- Can include specific measures of transfer and adaptation as well as information for improvement
- Allows for updates without starting over
- Integrates 21<sup>st</sup> century skills, cognitive demands, and content. Can include screen for linguistic features

Yoshi 3-06-13 v1

18

© Regents of the University of California

# Adaptation

## Description of Approaches to Adaptive Training (Landsberg et al., 2012)

Variables	Examples
Macro	Adaptation takes place based on assessment prior to instruction
Aptitude Treatment Interaction (ATI)	Instruction is adapted based on student aptitudes or abilities that can be matched with certain types of instructional techniques or content
Micro	Instruction is tailored based on a student's current on-task performance of the training tasks
Two-Step	A hybrid approach that combines the ATI and micro-adaptive approaches. Initially, instructional conditions are chose based on ATI; later in training instruction is tailored based on student's performance

## What Learner Variables to Adapt (Shute and Zapata-Rivera, 2012)

Variables	Examples
Cognitive abilities	Math skills, reading skills, cognitive development stage, problem solving, analogical reasoning
Metacognitive skills	Self-explanation, self-assessment, reflection, planning
Affective states	Motivated, attentive, engaged, frustrated
Additional variables	Personality traits, learner styles, social skills, perceptual skills

## ITS/Simulation-based Adaptive Instructional Strategies (Spain, Priest, and Murphy, 2012)

- The complexity of providing micro-adaptive training software requires a system that is able to automatically asses student aptitude, diagnose strengths and weaknesses, and adapt coaching (e.g., feedback, hints) to student performance as they learn
  - Assessment of complex performance; comparison of student performance to a desired level of mastery (e.g., student and expert models)
  - Computer-based adaptive training is resource-intensive and requires expertise from a variety of domains including instructional design, artificial intelligence, human-computer interaction, and the learning sciences

## Types of Approaches (cont'd) (Schatz, Oakes, Flosom-Kovarik, and Doltski-Lerar, 2012)

- Adaptive as Preference: The system customizes instructional material based upon learner-inputted preferences, such as preferred level of difficulty
- Role adaptation: Learners select their roles, such as "instructor" or "aviator," and are then presented with a version of the curriculum based upon the roles' learning objectives

## What Instructional Variables to Adapt (Shute and Zapata-Rivera, 2012)

Variables	Examples
Feedback	Types: hints, explanations Timing: immediate, delayed
Content sequencing	Concepts, learning objects, tasks, items, cases or problems to solve
Scaffolding	Support and fading as warranted; rewards
View of material	Overview, preview, review, as well as visualization of goal and/or solution structure



## Feedback Types (O'Neil, Chuang, and Huang, 2010)

Type	Description
Performance	Performance feedback provides students with information on accuracy of work
Motivational	Provides information on progress and competence; may include social comparison and persuasion
Attributional	Links student performance with one or more attributions
Strategy	Links student performance with one or more strategies used

Yoshi 3-06-13 v1

25

## New Research Challenges

- Overlap in conceptual definitions
  - Creativity part of many constructs
- Lack of reliable and valid trait questionnaires for selection purposes
- Few state measures for diagnostic/remedial purposes
- Few trait measures for evaluation purposes
- Lack of applying known psychometric techniques into game/simulation scoring (e.g. cut scores)

Yoshi 3-06-13 v1

26

## CRESST Web Site

honeil@usc.edu

Yoshi 3-06-13 v1

27

## BACK UP SLIDES

Yoshi 3-06-13 v1

28

## Four Levels of Feedback (Hattie and Timperley, 2007)

- Task level (how well tasks are understood/performed)
- Process level (the main process needed to understand/perform tasks)
- Self-regulation level (self-monitoring, directing, and regulating of actions)
- Self level (personal evaluations and affect, usually positive, about the learner)

Yoshi 3-06-13 v1

29

## Four Characteristics of Feedback

- Complexity of feedback
  - What information is contained in the feedback messages
  - Degree of elaboration
- Timing of feedback
  - When is the feedback given to students
  - In complex learning delayed better than immediate
- Representation of feedback
  - The form of feedback presented (text vs. graphics)
- Frequency of feedback
  - Lowering percentage of feedback
    - Slows down the Acquisition of Knowledge
    - But facilitates Transfer of Knowledge

Yoshi 3-06-13 v1

30

## Role of Guidance

- Minimal to moderate guidance
  - Constructivism
  - Communities of practice
  - Problem-based learning
  - Inquiry learning
  - Immersive learning tasks
  - Serious games
  - Discovery learning
- Fully guided instruction
  - Direct instruction
  - Guided experimental learning
  - Guided discovery learning
  - Explicit instruction

Clark and Harrafin (2011)

Yoshi 3-06-13 v1

31

## Guidance as an Instructional Strategy

- Clark (2011, p. 368)
- Provide an accurate and complete demonstration of how (decisions and actions) and when (conditions) to perform a task or solve a class of problems
- When adaptive transfer is required, guidance must also provide the varied practice and declarative knowledge that permits learners to adapt a procedure to handle a novel situation
- Guidance requires forced individual application practice of procedures accompanied by immediate corrective feedback on part and whole task versions of problems and tasks that represent those to be encountered in the transfer environment
- Evidence indicates full guided instruction improves retention and transfer when contrasted with minimal to moderate guidance (Kirschner, Sweller, and Clark, 2006)

Yoshi 3-06-13 v1

32

## Purposes of Testing and Assessment

- System-Oriented
  - System Monitoring
  - Policy Formulation
  - Program Evaluation
  - Program Planning
  - Institutional Accountability
  - Personal Accountability
  - Instructional Improvement
- Individual/Team-Oriented
  - Individual/team certification
  - Admissions and selection
  - Placement
  - Individual/team progress and learning
  - Diagnosis/prescription

Yoshi 3-06-13 v1

33

## Measurement of Content Understanding and Problem Solving

- Retention
  - Explanations
    - Mayer type in SWOS
    - Essay exams
    - Knowledge maps
    - Sweller approach for procedures
    - Multiple choice
- Transfer
  - A higher level in same game, another game
  - Mayer retention and transfer questions type in SWOS

Yoshi 3-06-13 v1

34

## Retention and Transfer Questions

- Retention (remembering)
  - Write an explanation of how you solved tactical problems in the MMTT scenario you just completed.
- Transfer (understanding)
  - Write an explanation of how you would improve the MMTT scenario, that you just completed, to train for a complex and unpredictable surface warfare environment.

Yoshi 3-06-13 v1

35

## Four Types of Transfer Questions

Type	Example
Troubleshooting	Suppose you pull up and push down on the handle of a bicycle tire pump but no air comes out. What could have gone wrong?
Redesign	How could you make brakes more effective—that is, how could you reduce the distance needed to stop?
Prediction	What would happen if you reversed the positive and negative wires on an electric motor?
Explanation	What does temperature have to do with lightning formation?

Yoshi 3-06-13 v1

36

## Measurement Issues

- Use of ontologies
- Trait vs. state
- High stakes vs. low stakes
- Coaching of motivational component
- Cheating (if self report)
- Transfer
- Role of the unaware/implicit/unconscious knowledge and motivation
- Lack of psychometrics for simulation/games
- Need affective attributes of cognitive readiness
- Domain independent vs. domain dependent

Yoshi 3-06-13 v1

37

## Measurement Issues (cont'd)

- Performance Assessment (K-12 lessons learned)
  - How many tasks scenarios are needed?
    - Live with the reality that performance assessment and time constraints lead to few tasks. Conduct generalizability studies.
  - What is role of gender and prior experiences?
  - Should 21<sup>st</sup> century skills be reported as single vs. multiple scores as profile and/or levels?

Yoshi 3-06-13 v1

38

## Key Assessment Methodology: Research Test Beds

- Needed for assessment fidelity in simulation/game environment
- Provides experimental test bed for learning and assessment issues
  - Learning variables include time, complexity, cue salience, cognitive framing, multi-channel stimuli, cognitive load, distraction, degree of fidelity, types and frequency of help
  - Supports the development of transfer tasks
  - Allows comparison of various assessment techniques, e.g. knowledge maps vs. multiple-choice formats
  - Permits experimentation with alternative statistical analyses of student process and outcomes, e.g., Bayes nets, neural nets, expert model-based cut scores

Yoshi 3-06-13 v1

39

## The Critical Policy Questions

- Are changes to R&D investments needed?
  - Very little research that explicitly addresses the teaching and assessment of 21<sup>st</sup> Century Skills, either cognitive or motivational issues.
  - What is needed is a focused R&D program rather than the occasional study driven by individual investigators' intellectual interests.
- How much R&D money is being spent on these issues?
  - In the U.S., very little.

Yoshi 3-06-13 v1

40

## What's Next?

- Test/teach 21st Century skills with recent high school graduates or college graduates
- Complete edited book in 2012 on Teaching and Measuring Cognitive Readiness (21st Century Skills)

Yoshi 3-06-13 v1

41

## CRESST's 21st Century Skills and Attributes

Skills and Attributes	Definition
Adaptability	Functional change (cognitive, behavioral, and/or affective) in response to actual or correctly anticipated alterations in environmental contingencies
Adaptive Expertise	Entails a deep comprehension of conceptual structure of the problem domain. Knowledge must be organized and structures must be flexible. Adaptive experts understand when and why particular procedures are appropriate or not
Adaptive Problem Solving	Adaptive problem solving involves the ability to invent solutions to problems that the problem solver has not encountered before. In adaptive problem solving, problem solvers must adapt their existing knowledge to fit the requirements of a novel problem  O'Neil views problem solving as being composed of content understanding, problem solving strategies, and self-regulation

Yoshi 3-06-13 v1

42

## CRESST's 21st Century Skills and Attributes (continued)

Skills and Attributes	Definition
Communication	The timely and clear provision of oral and written information
Creative Thinking	Creative thinking ability (potential) is a predictor of creative accomplishment, but it is not the outcome per se. Creative thinking ability is the cognitive ability to generate ideas and solutions that are novel and of high quality
Decision Making	Use of situational awareness information about the current situation to help evaluate the utility of potential course of action and then execute a course of action
Metacognition	Metacognition contains two components: planning and self-monitoring. Planning means that one must have a goal (either assigned or self-directed) and a plan to achieve the goal. Self-monitoring means one needs a self-checking mechanism to monitor goal achievement
Situation Awareness	Situation awareness involves being aware of what is happening around you, to understand how information, events, and your own actions will affect your goals and objectives, both now and in the near future

Yoshi 3-06-13 v1

43

## MMTT Study

- Scenario level was advanced level
- Selected cognitive readiness constructs assessed pre-post MMTT
- Three instructors and 52 students answered retention and transfer questions
- Expert/novice scoring system
  - Students compared to experts (instructors)

Yoshi 3-06-13 v1

44

## Problem Solving Results

	Retention	Transfer
Mean	2.42	0.96
Standard deviation	2.28	1.17
% retained/transferred	24%	9%

Yoshi 3-06-13 v1

45

## Cultural Adaptability

- Taking action to learn about and understand the climate, orientation, needs, values, etc. of other groups, organizations, or cultures.
- Integrating well and being comfortable with different values, customs and cultures.
- Willingly adjusting behavior or appearance as necessary to comply with or show respect for other's values and customs.
- Understanding the implications of one's actions and taking steps to maintain positive relationships with other groups, organizations, or cultures.

Mueller-Hanson et al. (2005)

Yoshi 3-06-13 v1

46

## Feedback Types Arrayed Loosely by Complexity (Shute, 2008)

Feedback type	Description
No feedback	Refers to conditions where the learner is presented a question and is required to respond, but there is no indication as to the correctness of the learner's response
Verification	Also called "knowledge of results" or "knowledge of outcome." It informs the learners about the correctness of their responses
Correct response	Also known as "repeat-until-correct" feedback. It informs the learner about an incorrect response and allows the learner one or more attempts to answer it
Error flagging	Also known as "location of mistakes." Error flagging highlights errors in a solution, without giving correct answer

Yoshi 3-06-13 v1

47

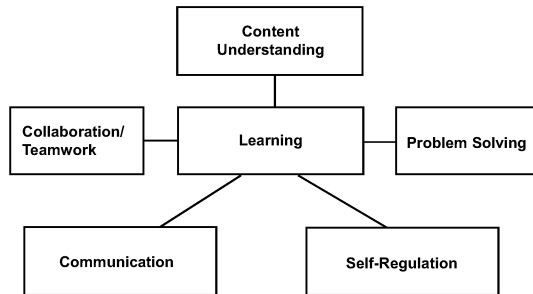
## Feedback Types Arrayed Loosely by Complexity (Shute, 2008)

Feedback type	Description
Elaborated	General term relating to the provision of an explanation about why a specific response was correct or not and may allow the learner to review part of the instruction
Attribute isolation	Presents information addressing central attributes of the target concept or skill being studied
Response contingent	Elaborated feedback that focuses on the learner's specific response. It may describe why the incorrect answer is wrong and why the correct answer is correct
Hints/cues/prompts	Guiding the learner in the right direction, e.g., strategic hint on what to do next or a worked example or demonstration. Avoids explicitly presenting the correct answer
Bugs/misconceptions	Elaborated feedback requiring error analysis and diagnosis. It provides information about the learner's specific errors or misconceptions (e.g., what is wrong and why)

Yoshi 3-06-13 v1

48

## Model of Cognitive Learning



Yoshi 3-06-13 v1

49

## Resilience

- Some individuals have a relatively good outcome despite suffering risk experiences that would be expected to bring about serious sequelae.
- Relative resistance to environmental risk experiences, or the overcoming of stress or adversity. (Butler, 2007, p. 205)

Yoshi 3-06-13 v1

50

Common Core Standards and High / Low  
Stakes Test for College Admissions in the U.S.

Transforming Public Education Through Outstanding Leadership

Jason K. Griffiths  
(The Brooklyn Latin School)

## Common Core Standards and High/Low Stakes Tests for College Admissions in the U.S.

Jason K. Griffiths  
The Brooklyn Latin School

## What are the Common Core State Standards?

- K-12 academic standards in mathematics and English language arts/literacy
- Aligned to the expectations of two and four year colleges
- Built upon strengths and lessons of current state standards and standards of top-performing nations
- Ensure comparability across schools, districts and states
- Provide more clarity regarding student expectations of student learning across the country
- Increase rigor of student learning

## Why are the Common State Standards Needed?

- 20% of students entering four-year colleges and 40% of students entering two-year community colleges must take remedial courses
- 62% of new jobs available in 2018 will require some postsecondary education (Georgetown Center on Education and the Workforce)
- The 2009 PISA math assessment revealed that 30 countries were outperforming U.S. 15-year-olds in mathematics

## Who was Involved in the Development of the Common Core State Standards?

- Student Achievement Partners (SAP) led the development of the standards
- Parents, teachers, school administrators and experts through their membership in the Council of Chief State School Officers (CCSSO) and the National Governors Association (NGA) helped to create the standards
- The National Education Association (NEA), American Federation of Teachers (AFT), National Council of Teachers of Mathematics (NCTM), and National Council of Teachers of English (NCTE) provided specific, constructive feedback on the standards
- Achieve, Inc., ACT, the College Board, and other organizations were also involved in shaping the standards
- The standards were voluntarily adopted by 45 states and 3 territories
- The U.S. federal government was not involved in the development of standards

## Common Core Math Standards

- Emphasize coherence at each grade level – making connections across content and between content and mathematical practices in order to promote deeper learning
- Focus on key topics at each grade level to allow educators and students to go deeper into the content
- Stress fluency – the ability to perform calculations or solving problems quickly and accurately
- Include Standards for Mathematical Practice which aim to foster reasoning, problem solving, modeling, decision making, and engagement among students

## Common Core ELA/Literacy Standards

- Emphasize reading, writing and speaking
- Include a balance of literature and informational texts to reflect college and career-ready expectations
- Increase focus on text complexity
- Highlight informative/explanatory writing and the use of using evidence to inform an argument
- Incorporate speaking and listening expectations for presentations and group work
- Address reading, writing and literacy across the curriculum, including literacy standards for science, social studies, and technical subjects

## Standardized Testing and Common Core State Standards

- PARCC and Smarter Balanced are two separate consortia of states working collectively to design and develop K-12 assessments in mathematics and English language arts/literacy aligned to the CCSS
- Each consortium was given more than \$175 million by the federal government to build assessments related to the CCSS
- Each consortium will create online assessments for in ELA and math for Grades 3-8 and high school
- The new summative assessments in English language arts and mathematics will replace those currently used by member states in 2014-15
- The assessments will inform:
  - determinations of individual student college and career readiness, high school exit decisions, college entrance, and college course placement
  - determinations of school effectiveness, principal, and teacher effectiveness

## Standardized Testing and Common Core State Standards

- **Similarities**
  - Both consortia use a mix of item types on assessments, including selected response, constructed response, technology-enhanced and complex performance tasks
  - Both measure individual growth as well as proficiency
  - Both measure the extent to which each student is on track, at each grade level tested, toward college or career readiness by the time of high school completion
  - Both will administer the assessments during the final weeks of the school year
  - Both will use electronic and human scoring with results expected within two weeks
- **Differences**
  - PARCC uses fixed-form delivery (students take one of several fixed, equated sets of items and tasks)
  - Smarter Balanced uses adaptive delivery (students see an individually tailored set of items and tasks) and a retake option is available for the end-of-year component

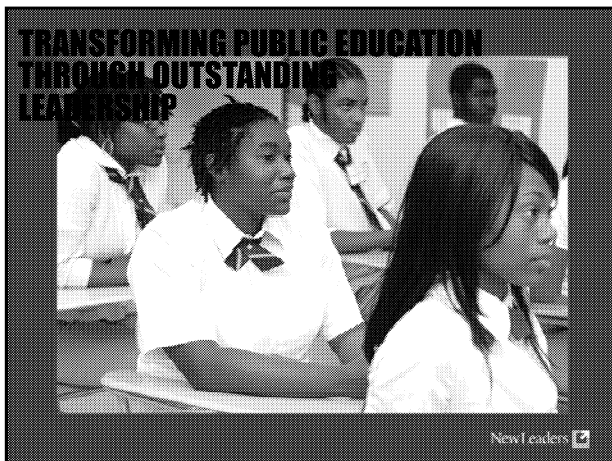
## Common Core State Standards and College Admission

- David Coleman, founding partner of Student Achievement Partners, has been recently named President of the College Board
- Coleman hopes to align the SAT with Common Core Standards
- Coleman believes the standards provide a blueprint for helping more students succeed in Advanced Placement Courses
- Coleman is pushing for universities to require an analytical essay in addition to a personal essay for college applications
- Coleman has also reiterated his concerns about the SAT's timed essay, in which style and structure now matter more than the accuracy of content; he imagined exercises that ask students to analyze source materials
- Coleman's hiring sent a strong signal about the College Board's commitment to curriculum reform

## Resources

- Student Achievement Partners
  - [www.achievethecore.com](http://www.achievethecore.com)
- The Common Core State Standards Initiative
  - [www.corestandards.org](http://www.corestandards.org)
- EngageNY
  - [www.engageny.org/common-core](http://www.engageny.org/common-core)
- Publishers' Criteria for the Common Core State Standards
  - [www.corestandards.org/assets/Publishers\\_Criteria\\_for\\_3-12.pdf](http://www.corestandards.org/assets/Publishers_Criteria_for_3-12.pdf)
- The Common Core Curriculum Mapping Project
  - [www.commoncore.org](http://www.commoncore.org)
- PARCC
  - [www.parcconline.org/](http://www.parcconline.org/)
- Smarter Balanced Assessment Consortium
  - <http://www.smarterbalanced.org/smarter-balanced-assessments/>
- Achieve
  - <http://www.achieve.org/>
- K-12 Center at ETS
  - <http://www.k12center.org/index.html>





## Who We Are

In 2000, New Leaders was founded to confront the education crisis and address the need for strong school leaders who could transform underperforming schools. We enacted an insurgency strategy – flooding the system with strong outside talent.

Our community has grown from 13 leaders trained in two cities to more than 1,000 leaders trained in 12 urban areas. Nationwide, our leaders currently serve a quarter of a million students, 80 percent of whom are eligible for free and reduced lunch.

New Leaders © New Leaders, Inc. All rights reserved. | 2

## What Drives Our Work

### Vision

We envision a day when there is educational excellence and equity in America – when our country’s public schools ensure that every student is prepared for success in college, careers and citizenship.

### Mission

To ensure high academic achievement for all children, especially students in poverty and students of color, by developing transformational school leaders and advancing the policies and practices that allow great leaders to succeed.

New Leaders © New Leaders, Inc. All rights reserved. | 3

## Program Model

Developed and launched an expanded leadership development program, which now includes the Emerging Leaders Program, a redesigned Aspiring Principals Program and the Principal Institute.

**Emerging Leaders Program**  
Develops a pipeline of leaders by training outstanding teachers and administrators in data-driven instruction and improving their adult leadership skills.

**Aspiring Principals Program**  
Provides on-the-job training through an intense year-long residency with a high-performing, experienced principal.

**Principal Institute**  
Institutes a professional learning community to provide critical support in the principalship.

**Capacity-building services to school system partners**

- Leverages EPIC to train additional leaders in the system
- Leverages deep knowledge base to support the design and implementation of coherent human capital management systems

New Leaders © New Leaders, Inc. All rights reserved. | 4

## Emerging Leaders Program

The Emerging Leaders Program is an early identification program that starts promising teachers and other instructional leaders on the pathway to becoming principals by developing their adult leadership skills.

- Builds leadership capacity for schools by creating a larger pipeline of principal candidates
- Serves as a career ladder for teacher leaders
- Offers a “turn-key” human capital strategy for our partners: a cost-effective way to identify and train promising leaders

More than 200 participants are impacting approximately 20,000 students in 11 low-income communities, and 95% of participants report an increase in their knowledge and skills in leading adults to drive achievement gains.

**Emerging Leaders Program Cycle**

New Leaders © New Leaders, Inc. All rights reserved. | 5

## Aspiring Principals Program

The new Residency provides Aspiring Principals with the opportunity to deeply practice the 15 key actions that lead to dramatic student achievement gains.

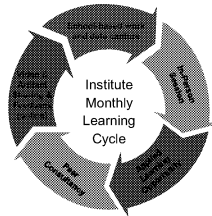
<b>Be highly visible and RESPONSIVE</b> Communicating the vision and mission of the school consistently.	<b>Build trusting RELATIONSHIPS</b> with adults and students.	<b>Identify promising TALENTS</b> and build up their confidence and skills.	<b>Seek, accept and act on feedback</b> and success.	<b>Engage in DIFFICULT CONVERSATIONS</b> in order to change adult actions and attitudes across students and interventions.
<b>CREATE ACHIEVEMENT</b> Build and set an action plan, track progress to guide decisions, and make adjustments to practice plan as needed.	<b>Lead outcome-oriented MEETINGS</b> with clear purposes.	<b>Use time strategically, delegating where appropriate and PRIORITIZING TIME</b> and resources to solve teachers' issues for student learning.	<b>Set, monitor and adjust CLEAR EXPECTATIONS.</b>	<b>Engage in adult practice, dialogue, and reflection</b> to ensure <b>ADULT PRACTICE</b> to ensure improvement.
<b>Model, develop and deliver HIGH-QUALITY PROFESSIONAL DEVELOPMENT</b> that shows no change in adult practice.	<b>SEEK OUT</b> schools, leaders and teachers with identified needs, whose practice and impact's education outcomes.	<b>Assess, mentor and build cultural skills and NEW LEADERSHIP</b> in urban, low-income schools.	<b>Understand how work, adults, and resources will be supported by all STAKEHOLDERS.</b>	<b>EMPHASIS COLLEGE CAREER</b> while attending to the needs of low-income students and their schools.

New Leaders © New Leaders, Inc. All rights reserved. | 6

## Principal Institute – Monthly Learning Cycle

*Assign skill-building projects that participants will be required to present to the group for assessment and learning*

Each Principal Institute session's content is driven by the work, challenges and experiences of our 1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> year Principals. Each session is a part of a larger monthly learning cycle where participants complete pre-work, collaborate during sessions, and implement learning in the field. Assignments and projects are individualized to participant need and local context.



## System-Level Impact

**We partner with states, districts and charter organizations through strategic consulting engagements to advance the policies and practices that support transformational leadership.**



**Designing new systems** for principal evaluation, principal hiring and selection, and principal preparation

**Leveraging EPIC** to design professional development for principals outside our programs

**Shared vision of excellence** in the principalship

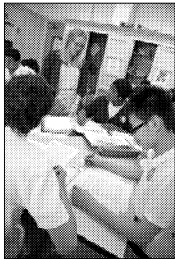
**Professional development for leaders** at multiple levels of the system, beyond the impact we have through our programs

**Provide aligned and supportive context** for New Leader principals

**Generate broader impact** by changing conditions for all principals in client states and districts

In 2013, the District Services team will focus on continued work in Memphis, and launching new efforts in Newark and Baltimore. Confirmed State Consulting clients include Connecticut, Indiana, and Tennessee

## Involvement



- Completed my residency in 2005-2006 in three different schools
- Mentored 5 aspiring principals in NYC
- Currently serve as a member of New Leaders NYC Advisory Board
- Member of the New Leaders national community

## Takeaways

- Provided me with an entire year to develop my personal leadership
- Developed my capacity in key principal competencies: teacher coaching, curriculum development, data driven instruction, adaptive leadership, efficacy, school culture, mission and vision formation
- Allowed me to develop my leadership as a mentee to a principal in a school setting
- Paired me with a leadership coach during my residency and first year as a principal
- Connected me with a diverse community of peers and experts who are at the forefront of educational leadership in the United States

## AP 日本語の設計と開発

松田結貴  
(メンフィス大学)


## AP日本語の設計と開発

2011年12月22日  
大学入試センター  
メンフィス大学 松田結貴

## Outline

- APプログラムの歴史
- 日本語APプログラムの開発
  - AP日本語特別委員会
  - AP日本語開発委員会
- AP日本語プログラムの設計
  - AP日本語コースと評価方法
  - 試験問題サンプル
- AP日本語プログラムの波及効果

## AP(Advanced Placement)プログラム

- 全米の大学協賛組織である非営利団体、カレッジボードが1955年から行っているプログラム  

- 優秀な高校生が大学に入る前に大学レベルの教育が受けられ、大学の単位も取得できる制度。APコースとAPテストから成る。
- 全米の60%以上の高校が提供している

## AP(Advanced Placement)プログラム

- APプログラムは30以上のコースについて学業成績の基準を設定し、教師のために幅広いトレーニングの機会も提供している。
- 2010年5月のAPテストを受けた学生数は1,845,006人（全米の約25%）で、17,861校の学校が参加した。5年間で学生数51%、学校数が16%増加

## AP(Advanced Placement)プログラム

- 全米の90%以上の大学、世界の40ヶ国以上でAPプログラムが認定されて、単位を与えたり大学の単位認定などに使われている
- フランス語、ドイツ語、スペイン語は1955年の開始時期から導入された

## AP日本語プログラムの開発

- 2003年にWorld Language Initiativeがスタートし、日本語、中国語、イタリア語、ロシア語が加えられた。
- カレッジボードがK12においてmulti-culture/multi-lingual教育に重点を置き始めた結果である

## AP日本語プログラムの開発

- 国際交流基金が資金的援助を、全米日本語教師会もスペシャリストを派遣するなどの支援を行った
- 毎年全米日本語教師の中からAP日本語テストの「リーダー (Reader)」採点者が選ばれる

## AP日本語 Task Force (2004-2005)

- 2004年秋に6人の高校日本語教師、6人の大学日本語教師がAP日本語特別委員会を結成
- 2004年—2005年に3回集まり協議した
- 任務：AP日本語コースの教育ゴール・オブジェクティブの設定

## AP日本語 Task Force (2004-2005)

- 全米の大学へのアンケート調査
- コースの概要とAPテストの形式を決定
- APテストのサンプルを作成

## AP日本語プログラム開発委員会 (2005-2006)

- 2005年の秋に初めてAP Japanese Language and Culture Development Committee (AP日本語プログラム開発委員会) が結成された。
- 初代の委員長はUCサンディエゴの當作教授

## AP日本語プログラム開発委員会 (2005-2006)

- メンバーは高校日本語教師3人、大学教授3人、Chief Reader大学教授1人
- ETS(Educational Testing Service)の評価方法の専門家と協議
- 特別委員会が作成したコースの概要とテスト形式を修正し、最終的なものにまとめた。
- 初年度(2007年度)から使われるAP日本語テストの試験問題を作成した。

## AP日本語プログラム開発委員会 (2005-2006)

- 委員会のアドボカシーのもと、2006年にAP日本語プログラムが開始され、2007年5月に第一回目のAP日本語テストが行われた。
- 委員会はAP日本語コースの教師に対する教育トレーニングや初めてのコンピューターを使った試験形式(IBT)の準備にもかかわった

## AP日本語プログラム開発委員会 (2006-)

- 初年度の開発委員会に引き続き委員長、委員の構成メンバーを変えながら、プログラム、テスト、教師のトレーニング、アドボカシーに取り組む
- 現在も毎年メンバーを変えながら、プログラムや試験の査定にあたっている

## AP日本語プログラムの設計

- 他のAPコースと違い、大学レベルの2年目終了程度のコースを目指す
- AP日本語コース終了で、大学の4セメスター終了程度のレベルに設定（約300時間）

## AP日本語プログラムの設計

- ナショナル・スタンダードに基づく
  - Standards for Foreign Language Learning in the 21<sup>st</sup> Century (ACTFL: American Council on the Teaching of Foreign Languages)

## AP日本語プログラムの設計

- 5つの教育目標領域
  - コミュニケーション
  - 文化
  - コネクション
  - 比較
  - コミュニティー

## AP日本語プログラムの設計

- それぞれの目標領域には学習者が習得すべき学習基準 (standards) が示される。
- 目標内容に合うように指導するための到達指標サンプル (sample progress indicators) が付記。11のスタンダード (学習基準) を設定
  - 幼稚園から日本語を学習し始めるとして、4年生、8年生、12年生、そして大学卒業時にどのレベルに達しているかの到達目標が示されている

## AP日本語プログラムの設計

- 3つの様式のコミュニケーションの力を伸ばすこと
  - Interpersonal (相互の情報のやりとり)
  - Interpretive (情報の解釈)
  - Presentational (発表)

## AP日本語プログラムの設計

- ナショナルスタンダードに基づき、文化の理解を導入することに重点を置き、AP日本語テストでも評価対象とする
- 学習者のコミュニケーションスキルと批判的思考分析スキル(Critical Thinking)を伸ばすことを目指す

## AP日本語プログラムの設計

- AP日本語コースでは、単に文法・単語についての知識を増やすことを目的とせず、言語運用能力の向上を目指している。
- AP日本語テストは日本語の運用能力をテストするので、文法や漢字の知識について問う質問(discrete-point questions)はない

## AP日本語プログラムの設計

- 基本的にはAP日本語コースで習ったことをテストする到達度評価(achievement test)であると同時に
- 運用能力を測る能力試験(proficiency exam)でもあることをめざし
- Pro-achievement testとする

## AP日本語プログラムの設計

- テストに出るタスクは実際に日本語で生活する際に遭遇するもの(例 駅のアナウンス、留守番電話のメッセージ)
- 実際の新聞記事やアナウンス、広告など生の日本語をできるだけ使用

## AP日本語プログラムの設計

- 日本語を読んだり書いたりするのに不可欠な漢字の導入
- 400から500個の漢字を指定してリストにまとめた

## AP日本語プログラムの設計

- コミュニケーションをうまく取るための戦略(communication strategies)、自分の学習効果を高めるための戦略(learning strategies)を身に付けさせる

## AP日本語プログラムの設計

- ▣ 現代の生活に不可欠なテクノロジーを利する能力を重視し、コース・テストに導入
- ▣ Eメールやチャットを想定した設問
- ▣ AP言語では初めてのコンピューターを使ったテスト(iBT)

## AP日本語コースの主な特徴

- ▣ AP日本語コース終了時の目標設定を、大学で300時間修了程度で達成するものとした。
- ▣ ACTFLのIntermediate-LowからIntermediate-Mid程度の能力に達することを目標とした

## 運用能力の目標 スピーキング

- ▣ Intermediate-Low
  - ▣ 簡単な状況でのサバイバルな会話ができる
  - ▣ 簡単な自己紹介、家族の紹介、あいさつ、自分の好み、趣味を伝達
  - ▣ 買い物に行ったり、レストランで注文
  - ▣ 日常生活に必要な質問をしたりできる

## 運用能力の目標 スピーキング

- ▣ Intermediate-Low
  - ▣ 習った単語や文をつないだ発話
  - ▣ 第一言語の文法や発音、言い回しに強く影響される。言い直し、不自然なスピード
  - ▣ 外国人の日本語に慣れている人にわかる程度のスピーキング能力

## 運用能力の目標 スピーキング

- ▣ Intermediate-Mid
  - ▣ 日常生活に必要な発話ができる
  - ▣ 具体的な事項について話ができる（自己紹介、家族の紹介、自分の興味）
  - ▣ 旅行、娯楽、大学生活、買い物に必要な会話

## 運用能力の目標 スピーキング

- ▣ Intermediate-Mid
  - ▣ 質問に答えるにとどまることが多いが、日常生活を行う上で必要な情報を得るための会話もできるようになる



## コミュニケーション能力の目標

- Interpersonal Communication (Speaking)
  - 挨拶など形式的な表現が使える
  - 個人についてや、学校生活、買い物、また日本の文化について情報を得るための質問ができる
  - 文化的に受け入れられる発話で招待、提案したり、受けたりできる

## コミュニケーション能力の目標

- Interpersonal Communication (writing)
  - 漢字・仮名を使って必要な情報を手紙やEメール、メモ、チャットなどで得ることができる
  - 文化的に受け入れられる形で手紙やEメール、作文、チャットなどで情報を提供できる

## コミュニケーション能力の目標

- Interpretive Communication (reading/listening)
  - 日常生活に必要な情報をおおまかに把握し、推測することができる
  - 年齢に適した内容に関する生の情報の要旨をだいたい理解することができる
  - 文化や社会に関する人の意見がだいたい理解できる

## コミュニケーション能力の目標

- Presentational Communication (writing)
  - 過去の経験についてコンピューターでエッセイが書ける
  - 日本の文化、製品、慣習について書いて説明したり、自分の国のものと説明したりすることができる

## コミュニケーション能力の目標

- Presentational Communication (speaking)
  - 日本の製品や文化的習慣について説明したり、自分の国のものと比べたりできる
  - 学校でイベントやアナウンスなどをできることができる
  - ナレーションや物語を皆の前ですることができる

## トピック

- AP日本語プログラムで扱うトピックは：
  - 自己や家族
  - 学校、教育、仕事、社会
  - 日常生活、余暇、趣味
  - 食べ物、服、買い物
  - 旅行、交通
  - コミュニティ、家庭、町
  - 祭り、祝日
  - 環境、健康
  - メディア・テクノロジー

## AP日本語テストの形式

- Section I : Multiple Choice
  - 70 questions
  - 50%
  - 1 hour and 30 minutes
- Section II: Free Response
  - 4 tasks
  - 50%
  - 45 minutes
- 2007年テストからのサンプルファイル

## AP日本語テストの形式

Section	Question or Task Type	Number of Questions or Tasks	Percent of Total Score	Approximate Time
Multiple Choice		Approximately 70 Questions	50%	1 hour, 30 minutes
Part A: Listening	Listening Selections	20-25	25%	20 minutes
Part B: Reading	Reading Selections	20-40	15%	1 hour
Free Response		4 tasks	50%	45 minutes
Part A: Writing	Text Chat	6 questions	12.5%	30 minutes
	Compare and Contrast Article	1 question	12.5%	20 minutes
Part B: Speaking	Conversation	4 questions	12.5%	8 minutes
	Cultural Perspective Presentation	1 question	12.5%	7 minutes

There may also be survey questions, which do not affect your score.

## テストサンプル Free response

- Cultural Perspective Presentation
  - Directions: Imagine that you are making an oral presentation to your Japanese class. First, you will read and hear the topic for your presentation. You will have 4 minutes to prepare your presentation. Then you will have 2 minutes to record your presentation. Your presentation should be as full as possible.
  - Present your own view or perspective on Japanese meal customs. Discuss at least FIVE aspects or examples of Japanese meal customs. Begin with an appropriate introduction, give details, explain your own view or perspective, and end with a concluding remark.

## テストサンプル Free response

- Conversation
  - Directions: You will participate in a simulated conversation. Each time it is your turn to speak, you will have 20 seconds to record. You should respond as fully and as appropriately as possible.
  - You will have a conversation with Masao Yamada, a store manager, about a part-time job.

## 評価のルーブリック

- 6段階（1－6）それぞれに
  - タスクの達成
  - 表現(delivery)
  - 言語（単語の選択、文法の選択、正確さ）

## テストサンプル Free response

- Story Narration
  - Directions: Imagine that you are making an oral presentation to your Japanese class. In your presentation, you will narrate a story. First, you will see pictures depicting the story. You will have 4 minutes to prepare your narration while you look at the pictures. Then you will have 2 minutes to record your narration. Narrate a complete story as suggested by the pictures. Give your story a beginning, a middle, and an end. Narrate your story using complete sentences in desu/ masu style.

### サンプル Item specification Presentational (Story telling)

- Ability to narrate in a coherent manner and display cultural knowledge through story telling.
- Evidence: using appropriate expressions in a manner comprehensible to native speakers accustomed to dealing with learners of Japanese; provided pictures depicting the events of culturally based story should be covered in sequence 2 minutes for preparation and speech for up to 2 minutes

### サンプル Task definition Presentational (Story telling)

- Setting characteristics: oral presentation in class
- Topic characteristics: Various (桃太郎、かぐや姫、傘地蔵など)
- 2 minutes
- Requires demonstration of knowledge about cultural story

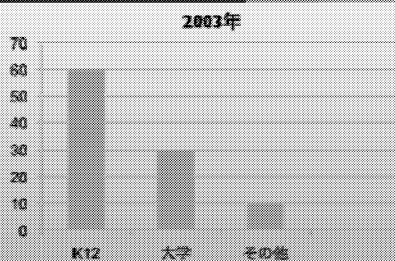
### AP日本語プログラムの波及効果

- 全米でAP日本語コースの学生数が増加
- それにともない全体の学生数も増加
- カレッジボードや開発委員会が提供するセミナーや学会に参加し、日本語教師の間でも日本語教育の質を更に高めようという傾向が広がった

### AP日本語プログラムの波及効果

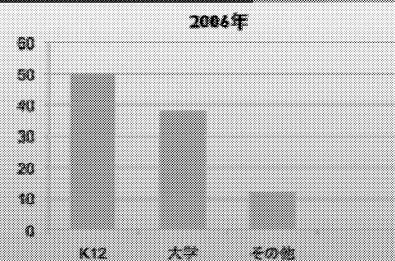
- 日本の不況が長引いているにも関わらず、2000年ごろから日本語を取る学生が増えてきている
- 1998年から2003年にかけて24%の増加
- 2003年から2006年にかけて16%の減少
- 2009年の調査では19.7%の増加

### AP日本語プログラムの波及効果



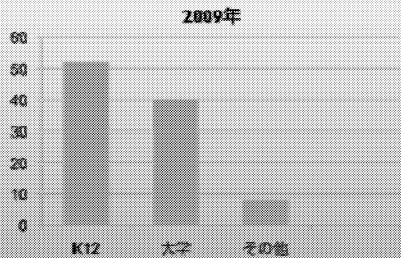
Survey report on Japanese Education Abroad (the Japan Foundation)

### AP日本語プログラムの波及効果



Survey report on Japanese Education Abroad (the Japan Foundation)

## AP日本語プログラムの波及効果



Survey report on Japanese Education Abroad (the Japan Foundation)

## AP日本語プログラムの波及効果

- AP日本語の受験者数
  - 2007年：1667人
  - 2010年：2051人
- AP日本語コース
  - 2011年：216
- 日本語学習者数の増加はAPプログラムの波及効果

## AP日本語プログラムの波及効果

- 日本語教育におけるK12と大学との連携が深まる
- AP日本語コースの内容が高校のオーナーズのコースのモデルやスタンダードになり、より優秀な学生を生み出せる
- 大学で日本語を継続して取る優秀な学生が増える

## AP日本語プログラムの波及効果

- K12全てのコースに加えて、大学のカリキュラムも必然的にコミュニケーション・日本語運用能力を重視したものに変わる
- APプログラムを提供する学校がある地域では生徒が早くから日本語を勉強できるため、より能力のある学生が大学に入ってくる

## AP日本語プログラムの波及効果

- 米国のナショナルスタンダードの出版に基づき、日本でも国際交流基金がCan-Do statementsに基づく日本語スタンダードを発表した（2010）
- 日本語能力試験の形式も2010年より改定
- ビジネス日本語試験など評価方式が変化

## まとめ

- AP日本語プログラムは時代に合ったコミュニケーション・内容を重視する言語教育の考え方・評価方法、教授法を採用した
- この決定はAPコース・テストのみならず、全米の日本語教育、敷いては世界中の日本語教育に影響を与えた

☆第6プロジェクトの研究の目的・意義について：

特に、北米および環太平洋地域に着目し、論点設定に主眼をおいた。

- ・高大教育接続のグローバル性の検証、
- ・アドミッション・ポリシーの比較国際政策研究、
- ・諸外国における革新的制度の健全性および有効性の検証、
- ・研究者および行政官から構成されるプロフェッショナル・ネットワークの構築、
- ・カレッジアドミッションにおける世界同時多発現象の検証、

を念頭に、国際セミナー等の開催を通じて、論点に対する多面的価値・視点の抽出、外国調査による情報収集、および国際議論を通じて論点整理・確認などを行う。適切な論点の抽出とそれに伴う問題の解決に向けて適切なアプローチ発見のための基盤研究。

独立行政法人 大学入試センター  
入学者選抜研究機構入試評価部門第6プロジェクト報告書

「グローバル化と大学入試」  
ー第6プロジェクト（2010-12）の総括としてー

---

発行 平成 25 年 3 月 31 日

編集・発行 独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構  
〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23  
電話：03-3468-3311（代）

印刷 株式会社 コームラ

---

